

或紳士は云ひき。面倒なる掛合事の書状は、妻女に代筆せしむるに限る。何となれば、男子はいかにしても、其言語辭句自ら、剛く荒々しくなるもの故に、よし無き事より、先方の感情を害する事あれども、女子は之に反して、其資性の温雅なるに連れて、文章も、自然圓滑となるからに、大に他の氣受けを宜からしむることありと云ひつるにても、其女子が手に成れる文學の甚だ我と異なる所あるを見るべし。我のは、歌詠及び花鳥風月の記事的文章こそ、女子が筆にせるは愛たくもあれ。其理を辨じ非を駁する、論文的のものに至りては、到底男子と肩を並ぶるもの甚だ稀なるを覺ゆ。こも亦、其が教育の方法と、社會の習慣とによりて、然るものによ。以上述べたるが如き有様なれば、文學者と云はれざる程の女子に在りても、苟も普通教育を受けたる者に在りては、大抵の書物は、其手に一任して、容易く取扱はれ得るの便利は、男子をして、彌對外的志想を發ひ、大なる事業に身を委ねて、内事を顧るの念を少うせしめたるには、相違無かるべしと雖も、亦、其嫌惡すべき、一例證を云へば、彼の汁の味噌臭きは、堪ふべくもあらずとか云ひけんやうに、我こそ、天

下の學者よと云はぬ許に、打ち振舞ふ、えせ女博士の舉動なりかし。今左に最も慕はしく思ひし女史と甚だ嫌ふべく感じたりしとの二例を掲げん。某女教師の家に相住せる、年若き一人の女博士ありけり。此人深く文學の道を好み、英京倫動の某書籍館に取調ぶることのありしかば、強ひて母國を辭して、暫時、其が從姉妹なる人の家に寓居すとの事なりき。余も、親くこの女教師とは、行き通ひしつることなれば、時としては、此相住の女史にもあひけるが、女史が容貌の艶麗なるは、云ふも更にて、其言語應對より、舉止動作まで、あはれ、某の公主ども云はまほしき迄、覺えて、氣高く、嚴なる威儀、優に愛嬌づきたる容姿、清潔にして飾りなく、殊更に高等なる服装中々に、其人の眞美を顯すに似たり。されど、書卓の上に置かれたる文房具の數奇を盡したる、將た、其從姉妹と呼ぶなる人の、恰も、長上、貴賓に事ふるが如く、敬ひもてなしたるさまなど、いかに、其素性わからぬ人ぞ覺えし。女史は、常に慈善の事を好み、隨分に巨額の金を抛ち、貧民をも救助すと聞きたれども、晴なる食事、夜會などには、いつも避けて行かず。余

に遇ふ毎には深く東洋文學の妙を稱して其歐文に譯したるもの、限りは大方を涉獵し盡しつらん。時にはむづかしき種々の質問をも試みられき。女史が學の該博なる論の高尙なる實に誠に驚くに堪へたり。余は、ある日、ア、己が能く外國の語に達して、君と自在に其濫與をも語るを得ば、いかに面白く、いかに裨益する所多かるべきに、斯く不完全なる語を以て、ふつゝかに語るは、隔牆對花の憾少からずと歎じたるに、否とよ自らこそ、貴國の語を解せずして、君が文藻詞花の妙を探り盡すよし無きを憾むと云はれたる。そゝるに、汗あゆる心地せられし。女史は、中々の財産家なるよしにて、當國の紳士中にも、痛く女史を敬慕し、百万其懇親を求め、婚を許されん事を欲したるも、あゝとか聞けども、皆一も許す所無くして、俄に母の疾に托して、郷國某所とやらんに歸りぬと傳へ聞きたる、最と遺憾にぞ覺えたりし。其が愛讀せし、一小冊の末に、女史が自作の詩を心とも無くて、書き附けたりしを、某氏の辛うじて、從姉妹といふ人より請ひ取りて、秘め持ちたるものは、最も巧妙可憐なる、閨怨の詩なり。これを

見て、彼を思へば、或は、其終生の苦樂を共にせんと期したる、許婚の夫などに別れて、世をあぢき無く思ひ果て、名を變じ形を埋めて、暫時知らぬ境に遊び、文林の仙娥となりたる人にもやあらん。若し然らんには、女史が傑作の小説、あるは名詩の世に著るゝ事もあるべしなど、云ふ人もありきなど、後に聞きて、なほ思へば、げに、何と無く物思はしげに、打ち沈みたる所ありきかし。近頃は、身のやうく、か弱く成りぬるは、長かるまじきにや、自が血族は、みな天死のみ多く候からに、などありしさへ、思ひ出でられて、あはれに戀しき人柄にこそありけれ。眞の名は何といふ女にて、孰の國の人にかありけん。

又某婦人會に某夫人に伴はれて行きつる事あり。と見れば、窓下の椅子に凭りて、喋々と談論する女子のありけるを、諸共なる夫人は、眉を皺めて、そと、余が膝を衝き、見給へ。彼の怪物を、斯かる女の、漸々、多く成りもて行くこそ、最と淺間しき世なりけれ、とあるを、何にかと、能く見たれば、年齢卅歳許にもやと覺ゆる女の、頭髮は、極めて短く、男子の如く切りて、紺羅紗の

帽子の飾りなきを戴き同じ色の衣服上部は更に男子のと替る所も無く、唯袴のみ女子なりと見ゆるものを穿ちたる其さへ竹筒のやうにて、にも句もつゆ無かりき。左の手には柄の長き眼鏡を持ちて時々眼の邊に差し當てつゝ何の容赦會釋も無く、彼是の顔を見廻したるいと憎し。耳にはさみたる鉛筆を取りては折々何事かを手帳に寫すあり。やゝありて此方さまに寄り來つれば夫人は更に耳語して御身が外國の人なるからに、又よき種取らんとて物云ひかくあり。「よし、彼を失望させてこそ遣らめとて待たるゝ程果して彼女は余と夫人との側にむつと坐を占めたり。續きて其が後に添ひ來る、一紳士の左も迷惑げに左も困却したる跡にて夫人に向ひ一別以後の挨拶を述べて、此女史は余が古き同窓の友にて候。いかで夫人に紹介せられよ。且同伴の東洋夫人にも君より願ひ給はれとの事にてと云へば夫人は莞爾に笑みて打ち領き更に愕然として女史を見軽く握手の禮を施したり。紳士はヤレ嬉やと思へるさまして他の人の呼ぶをまほに今唯今とて逃ぐるが如く何方へか走り去

りぬ。其時彼の女史は早く口を開きて先づ夫人が高名を聞き及びたるに幸にして今日遇ひ見たる悦を述べ更に語を轉じて余に紹介を求むる旨を述べたてたり。語のをはる時夫人は冷然として御身も既に知らるる如く己は保守主義の人御身は急進主義の人我云ふ所は御身の氣に入らざるべく御身のいはるゝ説は我心に協はず。されば普通の談話を爲すに止まるは取て辭せざる所なれども女子教育論の如き眞面目なる咄は己云ふ事をも欲せず。又聞くことも望まざるなり。加ふるにこの我賓客は余をよして極めて多忙なるなり。僅の滞在時間になるべく種々の事を見聞せられんとなれば今日もこれより又他の案内に應ぜんとせらる。斯の如く短き時間には到底御身が希望の要點を問ひ参らするよしも無からんと半云はせも果てず女史は其詞を遮りて否とよ。多くの時を許し給はずば三分にても五分にても唯己が斯かる珍客に遇ひたる事を余等同胞の姉妹に紹介するまでにと云ひたるに夫人はホ、と打ち笑ひて珍客が高教を篤と受給はらんとならば兎も角もたゞ御身が記事

一九六
の種に一寸目新しき事を取り加へらるゝてふことは最も賓客の迷惑とせらるゝ所ならん。世に益無き人に許多訪問せらるゝ許困難なるものはあらずかし。さらでだに此主は此所彼所の案内繁くて其れ一々に應ずること能はざるを憾みつゝ居らるゝ程なるをや。尙己を訪らはんとならば毎何曜に在せ。今日は先約の時迫りぬれば許し給へど會釋してすげ無くも其席を離れつ。其が後園を靜に廻りて街頭に出で夫人は余を顧て約束の時は猶早かり。公園を巡してこそ往かめ。とて更にほど太息して己が御身にゆめく泰西女子教育の弊風にな習ひ給ひそと云ひしはこゝの事なり。見給へ。彼等には優美閑雅靜肅貞正など云ふ女徳は那邊にかある。我身勝手に増長しては露許も他の迷惑をしも慮らず。人に向ひても更に包ましく恥かしげなるさまも無し。(彼國にて紳士貴女がふるまひといふは勉めて社會の禮式を守り他に迷惑をかけざるを以て徳とすることのみみじければなり)げにこそ心ある人の女子教育の前途に就きて一方ならず心配せらるゝは理なりけれ。返す返

女子の技術

一九七
すも智育の發達は能く注意すべき事にぞあると語られたるげにふるとこそ覺えたりしか。
女子の技術職業も亦種々ありて一々これを枚舉するに暇あらざるも先づ其重なる者を云へば教師(北米合衆國はもとより歐洲大陸にも教師はやうやう女子を以て適當なりとする論多きを加ふることさきにも云へるが如し)醫師(婦人科には最も女醫が適當なりとの説益々隆盛となれり)電信電話の技術、寫眞師、速記者、畫師、彫刻師、泥工師、花鳥人物等を造る(裁縫、刺繡、造花、製帽)其他各種の事大抵今は尙も男子の爲し得るほどの事は女子も亦學びて之を營むに躊躇せず。斯の如く女子が獨立の生計を立つるの道彌々廣く且多きを加ふるからに從ひて男子は勢ひ内地に逡巡して手弱女と處世の競争を試みてのみ居らるべきにあらねば遂に海外の殖民地に出稼ぎの方法を案じ出し又は何の探險など其の生命を賭してまでも一攫千金の偉業を思ひ起すにこそあれと云へる。げに左る理由もやあるらん。兎にも角にも彼が如く生存競争の烈き且は金の勢力最も容易ならざる。名譽を

保持し、権理を主張することの最も著しき國柄に在りては、泣きても笑ひても、自然箇々銘々に劣らむに負けじと、其の技、其術を勵み合ひつゝ、其の優を比べて、妙に達せんと勉めざるを得ず。斯くて知らずくも、其の程度を高め行くにこそあれ。其の務むる者と怠る者と賢き者と愚かなる者と、將た富める者と貧しき者との差、次第々々に、其の歩の遠ざかるを見ては、誰れしの人か、茫然無我夢中にて過ごさるべきかは。まして、其の敵國と境を接して、我れ一步を引けば、彼れ一步を陥入するをや。ア、我等も、また遂ひに此の渦亂中の人たるべきかと思へば、何事によらず、決して迂濶に鷹揚にのみ、御役目的の業なしては、えあらぬ世とや成り行くらん。

泰西の女子は何人も、父母の遺産を分與せられ、將た養子制度の無き國柄なるが故に、其祖父母伯叔母は云ふも更にて、或ひは大伯叔父母、從兄弟姉妹などさへ、其譲るべき近親無き時は、其遠縁の者も、血族の故を以て、其が遺産を受くること無しとせず。此分配法は、國によりて、大同小異なるも、先づ大抵のことは、其授くる人の遺言狀大いなる勢力を有するよしにて、其れが爲に、

随分に不可思議なる且つ厭惡すべき騒動をさへに惹起す事もあり。甚だしきは、父母新たに死りて、遺骸猶未だ冷かならざるに、永別離の悲歎に幾ぐべき涙は、却りて、其遺産争奪の慾火に消され、兄弟姉妹格の前に、口鬨舌戰を試み、甚だしきは、これを法廷に訴へて、其勝敗を争ふなど、實に聞くも思はしき談話も、少なからずかし。されど、こは是れ、其甚だ厭ふべき弊のある所を云へるにて、女子も、亦相當なる資産を得て、父母に離れ夫に別るゝの不幸に陥るも、其兄弟の厄介者たるの心配も無く、將た老いては、我が子の養ひを受けんといふ、心弱き頼みをかくるにも及ばぬ結果は、彼等が躰格の強健なるに合せて、耄耋老衰の人を出だすこと、存外に多からざるべく、老の癖も少なきにこそ、人の云ひたるも、げにぞ、賭はれぬべき。前條にも、屢々云へるが如く、金無くては、一日も生存する能はざる、社會に在りて、中等以上の生活は、如何容貌秀麗才氣煥發なる人も、資無きは、其自然の美も飾る能はず、其天賦の才も磨く能はず、况んや相應の嫁資を備へざれば、相應の婚を求むること

と能はざるからに、斯うやうの輩は物心つくが否、先づ那の道よりしてか、收金の方法を得んとすることを講ずるにて、種々の目的苦心を以て、一術一藝を學び業卒へては、日夜孜々として、且つ務め、且つ積み、其が貯蓄金額を多からしめんとする程に、我れを俟たぬ歲月は、早川の水と流れて、花顏徒らに、老の波を憾み、雲鬢長へに、秋の霜を悲しみ、空しく、孤窓寒燈のもとに、あなめく、と謠はしむる者、抑も亦幾ばくあるらん。さりとして、其智識藝能の上達するまゝに、志は高くなり、望みは大きく成りて、其求むる程の人には、嫁づくが懶うく、其嫁がまほしと思ふ人、將た思ふ所異なりて、我が希望を打ち出すべくもあらねば、已む無くも、拂はぬ眉の白うなるまで、獨住みはするぞかし。などの後言聞きたる事も、ありしが、誠に、さる類ひも交はれるにこそあれ。

某女教師が同胞は、九人ありて、六人は女子なりと云へり。長女は既に四十餘りの人、こは某醫學士に嫁して、先づ中等の生計を営めり。其次は、卅五六歳にもや。末女は、廿歳餘り許りと見えしが、孰れも美人の聞え高く

て、才の程も優れたりと聞けども、此五女未だ一人も婚嫁定めず、同じ家に相ひ住みして、學校教師、家庭教師、電信技手等の業を営み居れり。特に第四女は、道行く人も、覺えず、目を止むる許り、最も優れて麗しき貌容なりけり。其家は、先づ中等の下位許りが程と、人の云ひつるが、同じ品位の所々より、はつてを求め、媒人によりて、婚を求むる者、最も多かれども、孰れも心に合へるが無しとて、更に承引かず、唯一筋に己が職務なる教育の事に、彼女若し、斯許りの教育に無き人なりせば、はやう誘ふ水にぞ任せ果てなましを。兎にも角にも、一人して、世に經る程の業持たる故に、志のみ、次第々々に高う成りて、嫁期やう／＼に過ぐるまで、思ひ定まる方も無きなめり。斯くながら、あたらし盛りは、過ぎもやせん。いとほしき事ぞとよ。されど、色に愛で、形を悦びて、睦はんとする男の心は、大方浮きたるものなれば、其睦びの久しく頼もしきは、少なし。彼女が心強く、獨我が世を盡し果つるも、惜しと云へば、惜しきやうなり、笑止と云へば、笑止なるに似た

れど又能く思へば、中々に幸なるかも量られず。總べて女子は、男子と違ひて、存外に細かに遠く物業する者なれば、思ひ過つことの少なきにこそあれ。と語られつるが、其後はいかにしけん。是等も亦我れど、其風俗を異にする一つにこそ。

斯かる中にも、稀れには、相互の熱心なる希望により、又は、其父母の何等か見らざる所ありなどして、貧者の富人に嫁ぎ、富人の貧者に嫁するも無きにしもあらずと雖ども、先づ、大抵は、地位資産の相当なる者を求むるを習ひとすなり。是故に、日々の労働よりして、一錢二錢を貯蓄するが如き、下等人民は、云ふまでも無く、物足り、事給して飽く事知らぬ、富豪の家の子女も、其幼きより養はれたる、貯蓄心に富めるは、實に甚だ驚くに堪へたり。げに是國にして、宗教的慈善公共に盡すの心を奨励せしめざりしならんには、崇金の強慾心の、孰れの邊にまでか増長すらん。いと怖ろしく覺ゆかし。されど、其勉めて、冗費を汰し、其平素を約かにして、以て、有用の業公共の事に費やすに吝かならざるは、誠、感服の至りなり。斯くてぞ、女子に授くるに、巨額の資産を以て

するも、徒らならず。將た、其保護法の、充分に能く備はれるは、嘉みすべく稱すべき事なりかし。又、女子及び、幼少の人の爲に、其財産を能く保護して、容易に、他人の誘惑、詐偽などに罹り、不測の困窮に陥る等のこと、無からしむべき、方法は、政府よりも、各町村よりも、充分に、注意保管の出來得らるべきしくみありて、甚だ便宜に、且つ都合よくなり居るよしなれども、其中をさへくやりて、随分に、婦女少年を誑し、いと怖ろしき、奸計を行ふ、惡漢無きにしもあらねば、さてこそ、女子にも、其一身を有ち、家産を守るべきほどの、法律道理は、心得置かざるべからず、などの議論も、漸々盛んになり、女子將た、其等のこといをも尋ね知るやうには、なりもて行きしなれど、云へり。

省るべきものあり

女子の風俗

泰西女子風俗の概略を記さんとするに當りては、或ひは前條家庭のありさまの所と幾分か重複に亘れることもあるべく、又殊更にその重複を避けて省きたるものもは、ふと此一條のみを見てはいかにぞや思はるゝ節のあるべきも、亦た已むとを得ざるなり。

或人嘗て余が行を送りて曰、君泰西女子の教育を視察せんとす、僅々數百日の間に於て能く其要領を得んと欲せば、宜しく先づ其宗教を問ひ、且つ之れを探り察するべし。彼の國の事は、ひとり女子教育の上のみにはあらず、政治法律文學技藝其他百般の、愈々其源を宗教に發せざる者あるとなし。若し其れこれを探ぬるに意なくば、決して其効果を見るも、其原因を知ると能はざるべし。若し過去の歴史と其原因の如何とを知ること能はずば、いかに其が善悪可否の判断を過ること無きことを得んや。君能く之れを熟思すべし。といはれき。余其當時に在りては甚だ深く其詞に感ぜざり

宗教の影響

しなり。而して出で、其教育の場に臨むに及びて、爰に始めて其旨の妄ならざるを悟りたりき。何となれば、先づ其精神教育即ち德育の基礎の鞏固堅牢なる總べて、彼れ冥々に信ずる所頼む所あり。人間以上神なる者を、彼等が腦裡に彫り爲したるに因れるを、感じたればなりけり。げに泰西の人は邪より出で、正に進み、悪より化して善にぞ移りにけん。宜なり。彼れの教ふる所「罪」なるものを償はせんとするに在るとよ。扱も宗教の新舊各派如何を問はず、今いかにさまに行はれて、いか程女子の風俗に關係あるかといふに、先づ其女學者社會に在りても、其信ずる者と信ぜざる者との二派に大別せらるべく、而して理學者流派の徒には、哲學者流は無論無神論者多くして、其辯論大いに見るべきものありと雖も、ともすれば偏狹を以て嘲らるゝ有神論者の精勵不撓、其恐るべき理あるにも恐れず、其信ず可らざるものをも信じて疑はざる力は、屢々彼の博識多智の學者輩を壓倒して、其實踐躬行に見るべきもの少なからざるが故に、斯かる文化日新の大陸上宗教の威力尙未だ決して侮ると能はざるものあるを知るべし。殊に英國にあり

泰西婦女風俗 女子の風俗

ては、今代の英主ウヰクトリヤ女皇最も熱心なる敬神家に在りしにして、實に皇が慈仁剛毅の性は、もとにして宗教的徳育より來たり、其僧侶宣教師を優待禮遇せらるゝと、殊に甚だ鄭重なりとす。故に女子に在りては、いかほど賢才博識の令聞ある人と雖も、若し、一度不敬神家なりとの説、皇の耳に入る時は、皇は決して、眞誠に其人を尊信寵遇せらるゝと無しと聞けり。勿論彼の國にして、無宗教家の名ある人は、非凡の學者即ち、一箇の見識を有せる人の外は、甚だ恐るべきの徒多く、此種の人は、大抵智徳に勝つ者なり。決して、わが宗教家の、なほ淡白正直にして、存外有望の士あるが如くならざるなり。女皇にして斯くの如し。上の好む所下必ず甚しきものあり。英國女流の宗教に熱心なる、また偶然にあらざるなり。抑其宗教が女子に及ぼしたる影響は、一夫一婦の制度、風俗の組織、習慣より、社會一般の慈善事業、教育、交際、其他の事、總て、綱を宗教に取りて、其數條に分れたるもの、其結果の善なる所を言へば、歐米諸洲は、宗教ありて、始めて、人間の徳義各般の秩序も立ちけるなめりと、歎賞實に措く能はざらしむと雖も、其不結果なる點を擧ぐれば、

僧侶の傲驕偽善家、迷信者の其不知無識の徒に及ぼしたる惡弊、また尠少にあらざといへり。然れども、この泰西の如き、執拗剛愎、殘忍の民性にして、其往昔より今日に至る迄、若し、宗教の、斯民を感化抑制するにあらざりしならんには、彼等は、飽くと無きの怨を逞しうして、いかなる害毒をか世界に流したりけん。誠に西教の功徳、彼れに在りては、廣大無量なりと言ふべし。蓋し、宗教は、國性の如何に相ひ伴ひて行はるゝ者なり。若し、其れ、其教を奉ぜんとするに當りては、彼れに在りて、利なる者も、我れにありては、甚だ不利なるやも知るべからず。故に、決して、苟くも、す可からざるや、明かなり。請ふ、其結果の現況を掲げて、可否得失の跡を示さん。

女皇ウヰクトリヤが幼時の御家庭は、賢明なる母宮及び、嚴正なる傳母、乳母が抱負の功に因ると、少ながらざりしにもせよ。五歳の御年より、謹厚なる牧師、シヨード、ダヴ、非(後)ヒーター、ポローの僧官に登りし人が、旨と徳育の任に當り、其献身的補導に盡せられ給へる、皇が敬神の至誠、漲ぎて、仁慈恩惠の大澤となり、進りて、英邁勇敢の銳鋒と、顯れ、以て、斯道の光明と成

り給ひしからにげに無宗教家の目して悪魔と誹られ外道と罵らるゝも
 理にこそあれ。皇近來僊麻塞斯の痼疾に罹り給へるが故に萬づ不如意
 に在しますことなるよし。其迄は日曜毎に必ずウヰンザー城内の寺院
 に詣りて、御自ら祈禱を捧げ、且つ僧正が法話をも聽聞し給へりどぞ。又
 皇が其所生の諸皇子女を教育し給へるには、且つ、ペイナルの教へを自ら
 授けて、敢て荷くもし給はず。師なる僧正が、屢々諸皇子女の其意義に通
 曉し給へるに、舌を卷たりとぞ傳へ請け給はる。チエルトナム女學校の
 校長は、七十有餘の女博士なり。校は幼稚園より小中學及び大學科あり。
 塾舎も數軒に別れて英國女校中、屈指のものなり。且つこの老女博士の
 徳望甚だ最良じきも宜なり。其容貌態度極めて温厚謹恪にして其容を
 愛する親切懇篤至らざる所なし。余が同校に滞在中種々の質問を爲し、
 且つさまざまの談話をも試みたりしが、其己れが功は皆女神の徳に歸し
 て、毫も慢ずる氣色なく、朝夕の祈禱日曜日の謹慎扱も斯く博覽多識の女
 子にしてなほ斯かるは、げに宗教心の養成は、到底襍根の中よりしての習

慣によるにあらざれば能はざるとなりと感じぬ。これをケムフリツヂ、オ
 ックスホールド、兩大學女塾の校長と相對比して考ふるに、後者は學文あ
 り、見識あり、且つ最も交際にあつて、其儀式的敬神の容態更に點打つべき
 所無きに似たれど、數日間其家に止まりて、親しく其人の言行を見聞する
 時は、誠の覆ふ可らざる、また實に争ふと能はざる者あり。これが親切は、
 幾分か、世辭的口調と舉動とを免がれざりしなり。然るを前者が親切
 は、眞の親切にして、決して交際的修飾の親切にあらざりしを感じたりき。
 其一二を言へば、余がチエルトナム女校參觀の爲某の日より、某の日迄、滞
 在せんと約したりしに、折悪く他の招待の都合にて、同所はやゝ遠方の所
 なるが故に、案内せられたる日を斷りたりし、事前後兩回に及びぬ。然る
 に、女史は、最と可憐なる書翰を寄せ、何曜々々日は何學科某の日は何會あ
 り、何の時は何々の事あり。若し長く滞留せらるゝを得ば、斯うくせよ。
 短からばしかく、懇篤に示されつ。さて其所に兩三日宿泊して歸り
 し後、教授法等の事に就きて問ひ合せたき事ありて、書狀を遣はしたりし

にこれが爲に細やかなる返書をおこされたる事三回に及べりき。余は、女史が老年にして尙且つ多忙なるを知るからに、其餘りに巨細に懇切に認められられつるいとほしくて、中々に尋ねてこそは、止みぬべかりつるを、と迄ぞ覺えたりし。

又、アンアルサイトの家庭教師學校の校長なる老婦人も、こよなき宗教家なりしが、これ亦た其女生徒に對する親切懇情到底、人世毀譽名利の外に立つ人ならでは爲し得べき事にあらずと感ぜたりき。

佛國巴里の某宗教女塾の總裁及び校長、教頭は（無論尼なり）皆執れも、其家の女子なりし者のよしなれば、其品格容態の優雅高尚なるは言ふも更なり。親しく其塾生を取扱ひつゝある有様を見るに、温にして嚴寛にして約、其赤心をあして、他の腹中に置くに至りては、到底宗教國外の人の企て及ぶ可からざるものあるを見き。而して能く其人情の細微に亘りて、妙齡の女子に注意を加ふるとの緻密なる、また驚くに堪へたるものあり。されど、其權貴の父母兄弟に媚びずして、目下現政府が宗教を壓へ、宗教を

折き、其針路方向に反對しつゝあるにも關はらず、單り毅然として、其法教を死守したる、一つは、其維持資金の豊かなるによるにもせよ。げに斯くてこそ、宗教家は、脱俗の人なりとして、尊敬の意を起すに足るなれと思はれたりき。

蓋し、ザキントリヤ女皇が能く敬神の眞理を察て、其宗教の長所を取り以て自ら君徳婦道を躬行し給ひしからに、英國女子が鞏固なる精神は能くこの宗教的徳育より、打ち固められたるなり。其點に於ては、今は我等が國も遺憾ながらも、一步を彼れに譲らざる可らず。と、某佛國婦人が言ひたる。さる事もやあるらん。余は、各種の家族、幾多の女塾に宿泊して、屢々其過ちに陥らんとする者の腦裡に、無形の神を呼び起して、人咎めざるに慄然として、我れから心猿の狂ふを停め、其既に過ちたる事に就きての悔悟に、反然として、吝かならざる言語を見もし聞きもしつる度によし、其事の縱令迷信なるにもせよ。徳育に斯かる攻具を具備したるは、最と羨しき事なりと、感ぜたる事屢々なりき。宗教的慈善者の隱徳を行ひて、毫も其名を求めざるは、隠

れて爲したる善事は、後世に於て、陽はに大きな報酬ありてふ詞を懸るにて、限りなき大慈悲心の増長せるなりといふ。左もあつるべし。然れども、迷信大慈悲も、自他を害せずして却りて能く、社會に裨益あらば、之れを咎むるに及ばざるのみならず、寧ろ之れを奨励すとも可ならん。彼の伊佛の宗教、や衰頹の色を見はして却て、其道徳も亦た衰頹の兆ありとは、職者の既に論ずる所、獨逸帝の恐れて、以て熱心に小學兒童に、宗教的徳育の涵養を促さるゝ所以なるべし。

以上、説く所は、其宗教の善具なる結果をいふなり。以下は、少しく其弊害をいはん。然るに、利害の常に互ひに相ひ伴ひ、相ひ競ひて進行するは、孰れの世も免がれざる所なるべし。彼の加教の衰へたる表には、天晴なる善知識の銘打ちたる僧官の裏には、邪惡淫穢の慾を逞うし、其善男善女より欺き取りたる金幣を以て、己れが驕侈の具に供し了りたるなども、其一原因たり。其餘弊は引きて、今猶偽善、飾言の巧妙を極む。彼れが説教壇上に立ちて、熱心に説く所のものは、顯著なる神徳の讚美にはあらずして、他宗の非難と布

施少なき檀家の諷刺とのみなりといふに至りては、其弊亦極まれりと言ふべし。又、其偽信者に在りては、儀式的日曜日の寺詣では、眞に己れが不道徳者視せられざる防禦の屏障にして、己む無くも施與する貧民育兒の寄附金は、唯宗教家たり、慈善家たりといはるゝ名譽の紹介ならくのみ。或ひは某富豪者の、其が罪惡を隠蔽せんとして、可なり有名なる某宣教師を語らひ、其を我が方人とし、證人として、其が法衣の袖に隠れ巧みに世人の目を眩ましたりとの、冷評を耳にしたる事もありき。又、米國加奈太領モントリヤルの某町村には、新舊教の軋轢甚しく、今は學校修身科の教授に迄も互ひに他宗攻撃を持ち出して、頑是なき兒童にさへ、これを説き聞かしむるに至り、父兄の迷惑一方ならずと聞きにき。斯くの如く、一利一害のある所を權衡に掛けて、其孰れを重しとし、孰れを輕しとせんとは、暫らく具眼者の批評を待つべし。強ひて淺薄なるこの小冊子に記すの要無かるべしと雖も、尙云は、彼の泰西の如き、有力有益の宗教は、恰もこれ利刀の鋭きが如し。其鋭鋒の當る所、慎重なる注意を加へざれば、却りて其身を過つものあらん。然れ

ども中人以下愚夫愚婦をして善に向ひ正を蹈ましむるは宗教的徳育の感
 染最も容易にして且つ其効果著きは今古東西を通じて甚だ同一なるが如
 し。約言すれば泰西の宗教が社會風教の上に及ぼしたる影響は兎まれば一
 夫一婦の風俗の普く一般に波及したる事にしてこれのみは子女が家庭教
 育上に於けるも實に争ふ可からざる美事なりと言はざる可からず。され
 ど、こも亦た國體の異同によりては強ちに膠柱の論の爲し難かるべきは、も
 とより言を俟たざるべし。
 泰西女子の氣質總體を一括して如何さまにかと言へばわが東洋の女子よ
 りも剛毅なり活潑なり將た執拗なり強情なり。其智識はと言へば無論彼
 れの我れに優ると數等にして其粹を扱かば随分に堂々たる丈夫をも凌駕
 する者あるべし。彼國の女子は我國の女子の如く男子に比すれば猶遙か
 に其歩の及ばざるが如くならず。扱これを行人に比ぶれば彼れも亦た男
 子は一步を先に進めたるもの女子は其れに雁行して行くものゝ如し。さ
 るを我等女子は遺憾ながら男子の後へに立ちて歩み猶且つ其後れがら

なるを憾める者少なからざるべし、どの評もある程なりかし。其れ或ひは
 然らん。然れども諺にいふ阿彌陀も其裝飾がらによりて其光明に明暗あ
 り。彌の頭も信心がらにて彼れの俗女子を押し女子を尊び女子を稱へ女
 子を敬ふとのこよ無きが故に女子が企業は男子勉めてこれを助け女子が
 辯論は男子義理にも賞賛せざるを得ず。其れ斯くの如し。斯くの如くに
 して尙女子が學ぶ所の範圍も廣く交らふ人の種類も多し。孰れの道より
 して、女子が智識の日に其進歩を加へて女子が智識の著きが如く見ゆ
 るは、さる事にこそあれ。況して其氣質に於てはいかに我れよりも剛
 毅活潑なるべく我れよりも執拗強情なるべしと雖も、こも亦た其教育と
 習慣とによりて成るもの少なしとせざるが如し。彼れ剛毅強情なりと雖
 も情に脆く涙多きと決して我れと異ならざるなり。否なるべく其天真の
 情を挽めずして自然を欲するの教へは、彼等をしてまゝ其感情の行くまゝ
 に行はしむると寧ろ我れよりも亦た甚しき者あり。物に感じ事に驚きて
 氣絶し悲喜の極まる所公衆の前をも憚らずして且つ泣き且つ笑ふ。大人

も亦た小兒に類するが如きと少なからざるを見る。然るに爰に一つの怪しむべき事あり。總じて我が國一般の女子は、稀れには之れと反對の者あれども常に物事の甚しき變化あるを好まず。なるべく沈靜にして異常なからん事を欲するが故に冒險的事業の如きは無論不賛成を唱ふる女子多きを習ひどすなるに彼れに在りては先づ大抵女子は男子よりも尙物の移り替る事を好み、又存外に冒險の業を悦ぶに似たり。彼國の諺に『女子の心と雲の形狀』とは其替り易き例しに引き、又某博士の講義に『兎角女子は注意深きが如くなるも、亦た意思を永遠に廻らすと乏しき者なり。見よ。冒險の事業未知の旅行等、其良人が躊躇して熟考せんとする時にも、妻は大抵勸誘者の地位に立ちて督促を急にすなり。さて若し此事の熱く成就したればこそ、最良じともいひてありなめ、其が一蹶跌を爲したる時は、其始めに進まざりし未より、其進みたりし妻の却て還らぬ愚痴を並べて口説きましく泣きわめく者ぞかし。ア、移り易き女子よ。能く其一時の感情の爲に、輕しく其精神をな鼓勵せられそ。』とありしにても知るべし。是等は實に

英國婦人の氣質風俗

我と彼との氣質著しき反對の證なりとぞ覺ゆる。抑又泰西女子の氣質も、其人により所によりて種々さまざまなるべきも、其重なる國に就きて、其大方を大別し、先づ英國婦人の、其可なる所を擧ぐれば、剛毅にして着實なりといふべく、其不可なる點をいはい、執拗にして剛愎なりとや評すべき。總じて英人は男女ともに固守耐忍の力強く、又傲慢自尊の風甚し。故に其善に移り新きを取るこの運鈍なる代に、一度信じたる後は復容易に動かず。既に決行せしことは取て荷も一歩だも退かざるなり。是故に其交際、於けるも始は甚だ冷淡なるが如きも、相互其性行を知るに及びては、また輕々しく其交を變へず。其不親切なる人の最も強面き代に、其親切なる人は、非常に懇篤を極むるなり。其自を信じ、自を守ること甚しきが故に、其主義の爲め、道の爲に主張する所、確守する事、幾多の攻撃、無數の反對、敢て聞かざる者の如く、毅然として撓み動かすこと無きに至りては、抑も多情多感の女子にして、いかなれば斯くは、氣丈にせらるゝものぞ。彼女は血も涙も持たぬにやと迄覺ゆる事あれども、こは英國女子が、粘り強き耐忍の力否、或は甚しき

執拗の性の然らしむるにて中にはこれが爲に自ら其精神と身軀とを傷け疾ましめて遂に死に迄至らしむること無きにしも非ず。されば善に向ひて斯の如くなるは大によし。其惡に向ひても亦斯の如くならば實に誠に惡心すべき事なりかし。

英國政治家中には屈指の敏腕家某國會議員が夫人(夫人が生家は某伯爵)一日余が寓居に姪女を使せしめ某日某時夜食に會せられたしと促されぬ。折柄余は外出して家にあらず。歸りて其由を家人より傳へ聞きたれども其招待の日は既に他に約束せしことあれば已むなくも其を謝絶したりき。然るに某夫人は更に日を變へて再び案内されたりしかば今は辭まんやうも無くてこと受けしつ。其翌日許にかありけん余が在英中殊に親密に交際せし某婦人許訪らひつるに(夫人の事は既に某夫人の家族として掲げ置きつ)夫人恰も其案内受けたる日に於て某所に伴はんとありしかば余は某夫人より再應の招待に對し受書を送りたれば他日に爲し給はれといひつるに夫人の顔色見るく蒼白と變じて暫く

は物をも言はず。やゝありて息をつき、ア、女史には誰が御身を紹介せしぞ。咄誰がわが親友を紹介し参らせつるぞ。と問はれたる事のみ尋常ならず覺えつれば余は簡單に否人の紹介せしにては候はず受給はれば己がオックスフォード大學の女塾に滞在せし事を同校長の夫人に物贈られたるよしにて(女子はオ大學の卒業生なり)扱こそわざと其が姪女は遣はされしなりけれ。君はなぞてか最と左許は宜ふぞ。と問ひ返しつれば夫人はいたく打ち沈みたる調子にて、オ、理よ。御身は外國の人知り給はぬは宜なりけりな。我れ苟も貴婦人たる資格に對して此口よりさる不正事言ふに忍びず。君と我と並々の交際ならば我國の耻辱女子の汚點言はで止みたきは山々なれども言はされば御身を止むるよしも無く語らざれば我心を知らせ参らする道もなし。よし、今は詮方なし。いでや斯う淺間しき事なれど同胞の如き睦び親める御身に藏むは信無きなり。聞き給へや。驚きあきれ給ふなよ。とて語り續けられたる其概畧も要なきは余も亦省きて言はじ。鬼も角も彼の女史

が許婚の良人某氏其青年時代には英國未來の總理大臣なるべしと迄言
 ひはやされし程なりしも若冠の時一大欠點のありしより遂に其不徳を
 公に鳴らさるゝととなりけり。其頃女史は英領印度なる女子教育の
 不振を憂ひ其父母に請ひて奮ひて其地に至り自費を投じて其改良に從
 事しつゝありしが一度其未來の良人が惡評の世に傳聞せらるゝや。其
 親戚朋友より續々書を送りて速に離婚を申し込むべきよし忠告せしに
 女史は頑として毫も之に應ぜず。意外にも其良人たるべき人に電信を
 發して千百の非難億兆の反對に背き斷然前約を履行すべき旨をいひ送
 りぬ。某は其先非を悔恨して前途最早良縁を結ぶに望み無かりし折柄
 なりければ深く女史が厚情に感む數年の後遂に階級の契を全くするを
 得其始め云々の事ありしにも似ず伉儷甚だ密なりき。さりけれどもこ
 れが爲に父母も怒り親戚も憤り且其朋友にありては大抵女史に絶交状
 を送りて其友誼を断ちたりしなり。抑も女史は良家の女と生れて高等
 なる教育をも受けながら斯くも英國婦人の躰面を汚し女子の權理を踐

躪したるを惡みて今は貴婦人社會にありては誰一人として女史と交際
 する者なし。故に無論御身も其招待を謝絶し給ふが適當なるべし。と
 いはれき。斯かりけれども余は審に其意を解すること能はず。更に再
 び夫人に向ひて然り。某氏が事はいかにも許す可からざる罪惡たるや
 疑ふ可からず。されど女史は其良人が不道を忍び其親戚朋友にも背き
 て其節を全うし遂に良人の行を矯め彼をして其過を再びせざらしむる
 に至れりといへば其夫にこそ過失はあらめ。夫人には罪無きのみなら
 ず寧ろ任侠の心貞操の志高潔壯烈にして嘉すべきものあるにあらざる
 と問ひしかば夫人復曰く否々御身の言違へり。女史は自箇一身の欲の
 爲に情の爲に己が身を犠牲にして汚行の人に配す。若し社會てふもの
 無くば則ちよし。國てふものを顧ざらば則ち可ならん。然れども既に
 國あり社會あり。其地位より才識より將た女史が受けたる所の教育の
 程度より女史は純然たる英國の一貴婦人にして又一つの識者たり。天
 爵人爵ともに輕からざる婦人にして尙且其身を汚泥の底に沈淪せしめ

き。先進の女子斯かる不潔の男子をして更に挫折屈撓せしむること無
からしめば何を以てか後進の男子をして耻ありて且其行を高潔清白に
せんことを勵ましむべき。余は寧ろ彼女自身が上に微瑕ありとも其社
會全體の上に女子一般の上に及ぼす悪影響なくば之を耳にすとも各
めじ之を眼に見るとも知れりとは言はじ。汝は汝を爲せ。我は我を爲
すともいひてありなん。然れども斯の如く社會の上に波及する悪影
響は女子一般が格式を有つに於て已むなくも泣きて之に反對攻撃せざ
るを得ず。余もどより女史が情を悲めども亦女史が其情に流るゝの溝
志を惡む。女史は何が故に其断ち難き情を断ちて正義を死守せざりし
か。女史宜く其不義の良人が未來の福趾をも切斷し己が終世の戀愛を
も埋没し去りて英國婦人の格式を保つべかりしものを我等が彼女と断
ち彼女と齒せざるものは實に彼女一人を苦ましむるを欲せずと雖も唯
女子が軀面を正うして單に男子が獸性を撓めんとするに在り。勿論彼
等の地位彼等の才識ともに欠くる所無き人の上に就きての出來事陰に

懲らし撓むるに及ばずして陽に騷擾攻撃の舉をなして國てふことの恥
辱を思ふの意薄かりける其當時の失軀は我英國人にあるまじき輕舉な
りしは云ふ迄も無く實に苦々しき事なりけり。(彼女は自稱して英國人
にあるまじき舉動と云へり。其自尊其自信の狀を見るべし) 御身能く
之を味ひ給へかしとあるに余は其東西女子が取る所の見界の差別と且
其社會全體制裁力の強大なるに感ぜぬ。げに彼等が取る所の外交も
亦之に類する事あり。其自國が利害に關せざる事は冷々淡々何ものを
も措きて問はず苟も其これに影響するとしいへば衆口一致囂々とし
て之を論じ之を駁すること亦斯くこそあれど心の中に思ひ廻らしつゝ
君等が取る所の見識誠に好すべく稱すべきもの少なからず。余は深く
君が平素の性行と其戀情とを信する者なり。何事も君が助言に従ふべ
し。兎も角もし給へ。と言ひしかば夫人いたく悦びて忽ち机上の電信
紙を取り余は何女史をして君が招待を受けしむることを欲せずと記し
て夫人の名をもて其を出さしめぬ。斯く爲ば決して御身が非禮には當

らず余が之れを妨げたるなりと思はるべければとて甚だ得意の色ありき。斯の如く是國の女子が其信する所と信せざる所とを判然として甘んじて他の攻撃反對に當るの勇は實に甚だ驚歎す可きものあるを覺えき。

又余が寓居の婦人一日潸然として涙を流しいとほしや、不憫の事をしてけるよと獨語つるを何事ぞと問ひしかば、御身も記憶し給ふらん。何時ぞや某家にて遇ひ給ひたりし、色蒼白き瘦かたの婦人、彼女は我嫂の友達なりかし。彼女は、昨夕永眠せり、とて又ほろ／＼と涙を落しぬ。「あな痛ましや。何の疾にてか」と言へば、心經病なり。否、絶望病とこそ言はめ。彼女が上に就きては、一條の小説話ありと言ふに、いかなる事にかと問ひ返せば、婦人は太息を吐きて、彼女は、誠にも不幸の人なりしよ。彼女は某氏に許婚の後種々の故障ありて殆ど十年の長き年月を経しが漸くにして家を爲して、夫妻と爲ることを得たりき。然るに、幾程も無くて、其夫なる人は、異志持ちて、他妻を他に忍ばせ置きつるが、男兒をさへ擧げ

つるよしの日頃、經て彼女の耳に入りしかば、一時は心も在ふ許間へ敷きて痛く其夫を諷めたりしに、夫も深く先非を悔い、其惡き行を改めたる面色して、忽ち母子を他國へ逐ひ遣ると見せたるも、なほ一場の演劇にして再び此地に招き返し忍び／＼に其が許に通ひけるを彼女再び聞き出で、最早耐へ忍ぶべきやうもなし。兎やせまし、角やせましと思ひ、或ふ折柄、其朋友さへ漸々に洩れ開きて、速く離婚の断し給へかしと勸むる者、日に其數を加へぬれば、今は是迄なりとて、其手續を踏み馴れし住家を心と離れて立ち出でたりしが、同じ都の内に住ま人も懶しとて、某の海濱に加養しがてら移ろひ住みたりしかども、もとより彼女が愛の其夫に盡きたるにはあらで、其夫が情の彼女に薄く成りたるなれば、彼女は、女子の格式に傷けられざらんが爲に、已む無くも、断ちたる情緒は、結ばれて遂に一種の病となり、鬱々として、明かし暮らす程、身軀次第に衰弱して、頗る少くなりぬるよしを、前の夫傳へ聞き、いとほしき事に思ひ、竊に彼女が爲に、麗き花束作らせて持て行きぬ。夫、解たふと心の移るふ方出来て、其中

に子をさへ儲けたりしかば自ら其を捨て難く思ひ成りしなるべし。されど野中の清水もどより未遠永に結びたりし縁今更に其人憎しと思ひ果てたるにもあらねば病重しと聞きてはいかでかは憐れと思はざらん。其が友なる何某の媚を頼みて唯新に得たる友達と思ひなして、あからさまにも對面し給へかしといはせたりしを彼女は更に承引かず、今更になどてかどのみ答へてすげ無う花束をも返しつ。斯くて後は夫、いといとほしさの増さりて、日々に必ず訪問て、いつも愛たき花の種々求め贈りけれども、愈一度も取り入るゝことなく返しつるを媚餘りなる事に思ひて、遂には彼女が許も請はで、其が寐室の卓上に差置きてけり。斯くて日頃經て枕もあがらず成りつるに前夫の漸々婢女にも馴れ親みて、臥戸の外迄登り来るやうなるけはひのしければ、女は絶々なる息の下より、其戸は晝も内より鎖して、我答へずば、な開けそと命じぬ。斯くて命絶えなんとせし時例の持て來つる花束媚が、彼女の顔の邊に差し附けて見せしかば、彼女左も耐へ難きさまして、たゆげなる手に抓みて、接吻を施

しながら戸を堅くして、此後間しき形見せ給ふな。恨めしき人にと言ひて、其儘息は絶えたりしに、後に見れば、時の間側さらぬ者にて、肌身に、つと添へ居たりしは、それが結婚の當時に寫し、前夫と女との撮影なりきとぞ。最と憎きは男の心にこそあれ、と語られたる英國女子が、意地強く執拗なる性、將た耐忍の力のこと無き、此一事にても知らるべし。總て、高等教育を受けたる程の婦人、社會に於ては、人の誹毀讒謔に亘ることは、女子自身が資格に傷けざらんが爲に、取て荷もせず。(勿論親密なる女友の差向談には、尙随分に甚しき事柄に迄及ぶ事もあるよしなれども、さる代に一度、余は彼女を信せず、彼女には與せずなどいふことを、公衆の前にて口にしたり、以上は、縦令各種の會、其他の所にて、親く面を合せ、肩相摩するの近きに在りても、相互冷然として、目禮するのみにて、其詞を交へざるは、勿論握手の禮をも行はざるなり。其主義、權利の在る所を取りて、一步も引かず、地をも譲らず。確乎として、容易に動き變ること無き、一つは甚だ尊ぶべく、一つは誠に憎き迄に覺ゆる氣質なりかし。(尙種々の例證に引かまほしき事

あれども紙敷に限れば止めつ。
 扱其風采を如何にと言ふに英國婦人は總身に身長昂くして瘦がたなり。
 (但し其身非常に肥え太りて醜き遠見ゆるは多くは上流婦人の四十前後
 より六十内外の人に多し。十歳代より卅歳代迄の人は少し。こは是國
 にても餘りに肥太に過ぎたるは品なしとて妙齡の女子は脂肪分多き物は
 注意していたく食せずとぞ聞く。果して然るや否や)勉めて寡言を勉む
 見識を取る。彼等は威嚴餘りありて愛嬌に乏し。其坐作進退より言應
 答より整々として犯し難きも優に愛らしき句少し。(勿論これは重に上流
 中等の所をさす。其下等なるは恐ろしげなる迄覺ゆるもの少からず)こ
 れを天地の風光に譬ふれば松杉枝を交ふる常磐の山深々たる溪水秋月を
 宿すに似たり。若し中の一様の霜葉黃樹あらばまた一國の好風景なるべ
 し。(尙後段交際衣服の條を見合すべし)。
 余一日某夫人の園遊會に物しぬ。此家は其庭園に出る途の極めて狹小
 なればとて客室を通じて外に下ることあり。其室の壁間には最も

大きな鏡を懸けたり。其前を通り行く數十人の妙齡の女子一人も鏡
 に迎ひてそが影を窺み見る者なく殊更に能く眞向を見てまづと歩
 み過ぐるを見たりき。余は小事なれども此國の女子が其進退舉止に就
 きて斯の如く其見識を飾る事よ無きを感じき。(勿論中より以下下等
 の人に至りては劇場の廊下などにては鏡の前に立ちて身装を直し喋々
 其が品評をさへにする者多かりき)斯くて三々五々相集りて談話散步
 を試むる程年若き二人の女子打連れて庭の隅なる樹蔭深き處に入り
 ぬ。是よりさき余は某婦人に伴はれて其が裏手の小門の邊に至り外部
 の地形などの説明を聞きつゝありしが折から少し暑き日なりければ婦
 人も余も暫時此靜なる所に憩はんとて捨石に腰下したる程なりき。其
 時若き婦人の一人がオ、最前より御身の帽が傾きたるが氣になりてど
 いへば今一人がわらはれも向きやら左の重う覺えつればさぞおらんと思
 ひしかど某氏が傍去らず立ち添ひて談話せられつれば假初にも手を添
 へんことさへおならで遠く詞のと絶えおれかしと所々つと答へぬ。斯

くても互に其が格合飾りの花の批評などして、此木蔭に身繕ひし、さあらぬさまにて出で往きたりしが、此方は暗く、彼方は明かりしかば、我等が爰に在りけりとは、彼の女の知るよしも無かりけん。其間余は斜に兩女の方々に對ひたれば、見るとも無くて見もしつれ。同伴の夫人は背面なりしが、ふり返りて見などせざりしは、勿論二人の遠く去る迄、身動ぎもせず、又其去りたる後にも、其事に就きては一言も詞に發せざりき。こはこれ互にほの見聞きもし、又見られ聞かれもしたりとて、毫も耻づべきこと、惡きことにはあらねども、他の隠事知りたりと言ふは、貴婦人が格式上極めて賤むべき事なりて、ふ嚴なる教への習慣上、自ら戒めて何事も言はれざりけん。何と無き事柄なれども、其己と立て定めたる見識の鞏固確實なる、大旨斯の如し。

佛國の婦人は物に感動し易く、其極端より極端に走る性情は、善に移るも速にして、又惡に染むも速なりとぞいふめる。佛國の民性は火の如しとの評は、男女を通じて、常に然るなるべし。而して、其氣近く愛々しき、天然に優雅

巧妙なる言辭げに、交際的に造り爲されたる人といへるも、理なりや。兎もれ、孰の國に在りても、負けじ魂の強きは、大抵大同小異にして、最とこよなしと雖も、佛國人が一旦はッと燃え立つが如き、情の急なる、其永遠の耐忍力に至りては、英國人に及ばざるにもせよ。彼の普佛戰爭の敗後、其敵國に支出すべき、五十億法の償金を、其約定の期限に先立ちて返却し終へたる、勉強憤發も、多くは、其母たり、妻たり、又女たる人の、鼓舞獎勵によること多しとぞ聞ゆ。最といみじき事なりけり。されど、期の如き性は、其新しきを好み、舊きに飽くが如き癖ありて、所謂一寸づきのよき代に、其交情裡め易き傾き無しとせず。これ、其國難に殉し、國難を張り、巾幗の身能く斧鉞を取るが如き、女丈夫を出すと同時に、反逆狂暴女性にあるまじき、不敵の狂婦を出すことを免れざるなり。

佛蘭西婦人の風采は、先大抵身長低くして、(英婦人にして)肥え肉つき、圓顔にして色白し。(中には髪の眞黒なるもあり)舉止嬌々として優雅なる中に、又一種侮り難き見識のあるあり。是國の情を知らぬ人の、そが外見の華

奢豪驕なるを見て、女子も定めて、奢侈のみに耽りて家事經濟の事には疎か
らんと思ふもあるべけれど、決して然らず。佛蘭西女子は最も經濟に長け
て能く積み、能く散ずることを知るなり。但し都下の女子は概していへば、
やゝもすれば奢に流れて其裝飾品に心を奪はるゝことあるが故に、壯年紳
士の冷眼に、令嬢達が節儉てふ學科を卒業せりといふ事を聞く迄は、容易に
結婚の申込みは出來ず。若し然らずば、我等は妻君の首飾にて喉を締めら
るべしと。斯かるは其弊のある所を諷したるなるべし。其高等なる教育
を受けて、且最も上流の交際で馴れたる女子は、進退言辭謙遜許も他かぬ所な
く、寸鉄人を殺すの奇蹟巧にして卑ならず、壯にして又優實に幾多鉄腸丈夫
の心腑を溶解し去るに足る。恰もこれ、滿山紅花の春、黃鳥語ひ、胡蝶舞ふ。
人をして、轉た、其時の移るを知らざらしむるが如きものあり。蓋し其節操
と真正とを維持するに至りては、いかにもあらん。其極めて信ずる所の婦人、
其或る部分を除きては、余は之を知らず。
佛都巴里のオペラに、某大臣の夫人令嬢の誘引によりて行きたる事あり

き。兩女は、國色ある人にあらず、寧ろ十人並よりもやゝ劣りさまなりと
も言ふべかめるを、其裝飾の上手なるも、其態度應對の巧妙なるもにより
て、天然の容貌より、幾數等を高めたりとぞ見えし。余が同伴の女子は言
へり。「彼女が、寄宿舎にありし程に比すれば、いかにしても、同人とは見え
ず。さて、立派に見え給ふ事よと歎じき。斯くて、二三青年の紳士と物
語する程、嬢は、屢々、双頬に紅潮を呈し、物言はんとして言はれざるが如く、
詞溢りて、羞俯伏く時、母夫人の調子宜く、言を挿めるに力を得て、其談話を
續くるさま、可憐にして見所多かり。さりとして、其返答へつべき節々は、洩
らさず、殘さず、折々は、其犯す可からざる餘をさへ示して、宜き程にあし
らひつゝ、残り多く思はせたる、いかでわが年少女子も、斯かれば、かして迄、覺え
たりしが、願ひて、他の中等以下なる女子を見れば、ともすれば、身振り手眞
似の、咄騒々しく、最もあわ／＼しげに見えて、毫も重りかなる所なき、あな
笑止とさへ思はれて、爪弾きさへぞせられし。
獨逸婦人は、其家政に意を凝ぐこと專にして、猶其性質朴なる所多しと言へ

is new
how
washed in

り。然れども其音樂を嗜み、又斯道に巧なる人の多き、勿論泰西の人は概して音樂を好むもの多し其素朴の性行と相反するが如し。人或は言ふ。獨人の音樂を好み、且これに長ずる者多きは隣國の風俗に薰化せられたるもの多しと、余は其如何を知らず。女子も亦殊に理屈がましきやうなれども、其實利を尊ぶ事いみじとぞ。尙言は、何となく田舎武士の家庭に生ひ立ちたる女子の心地す。さるを、或人の傳ふるを聞けば、是國日新の富強文化は却て女子が資性を腐敗せしめたり。勇敢朴直の氣質風采は消滅して、華侈遊惰の性行と化し去りぬといへり。或は然ることもや。全株獨逸婦人が軍人を尊び、兵士を愛するの風は即ち是國尙武の俗の然らしむる所に於て、是近世迄諸歐洲各國より野蠻視せられたる國民の一體して、文明の名稱を擧取し、尙進みて最も侮り難き國なることを驚かせらるるに至れる所以なるべき。まことに女子が社會に及ぼす影響の少々ならざる、深く鑑むべき事なりかし。其態度風采に至りては、いかにしても、なほ疎野なる所を免れず。佛國の優

奧伊、白瑞
等の婦人の
氣質風采

雅麗なる形状と、正反對なるは勿論にて、極めて淡装を尊び、勉めて素朴を粧ふ、英婦人の風とは、また異にして飾なきが如き、言語動作より始めて唯何となく田舎びたるやうの感ありしは、其巴里より物せし、目移にもやかくは有りけん。總て、女權の強きは、歐洲にありては、英國を最とし、次は佛、白次は瑞、獨伊等、最下は、奥國にして、露國の風は、大陸中、また一種別格なりとの評なりき。

奥國の婦人は、大陸中、最も優美柔順にして、わが東洋婦人に劣るたりと聞けども、余を以て之を見れば、今こそあれ。東洋殊にわが日本に在りては、げに天然の美術國にして、自らなる優美の所こそはありけり。毅然として犯す可からざる、松柏霜後の高節、決して媚々々たる、今の奥國婦人にはある可からざる、氣象を存せりと覺ゆれども、奥國の女子にも、丈夫の如き人の無きにはあらぬと、先現況其總躰をいふなり。吾く前者の言に従ひて言はん、其男女相會したる堂上などにては、先女子が嬌然として、未識の男子に目禮し、時として、詞をもかくるが如きは、かの英國婦人の、惜き迄見識を取りて、願

泰西婦女風俗 女子の風俗

二二六
恥をだもせざりしさまに比ぶれば、何となく異様の感あり。又某女塾の校長に就きて、其が談話を聞き、其塾生が舉止を見るに、極めて大人しやかに愛しき事物にも似ず。其風采も花々として女らしく懐かしげなる物から、幾々乎として犯し難き威儀格式には欠けたる所多きが如し。出て、其王都公園の有名なる所に至れば、妙齡の女子花の如く、隊を作り、群を爲して椅子に凭るあり、木蔭に佇めるあり。はでに綺麗ひやかなる衣裳けいとい、其容姿を助けて、風に招く初穂の薄さはらは露の玉やこぼれんと見えて、いと艶なり。

白は佛國の小なるが如くにして、やゝ質朴、伊も亦佛に類して、最も美術の性情に富むも、其志操、意志は甚だ低きに似たりと傳ふ。瑞も、山水の美を移して、女子も優雅の風あるは勿論なれども、存外に智育、體育の進歩著くして、露國女子の大學に入りて學べる者思ひの外に、此國に多しとぞいふ。(風采の事は、尙衣服の所にいふべし。)

北米合衆國は、余が最も短き日數を以て、而も盛夏の時に於て、經過したるな

れば、其詳細を知るによしなし、但し、英領加奈太は別なり。こは、英と佛との入り交りたるが如し。唯其時に面會し、談話を試みたる婦人及び大陸に渡り來りたる人々に就きて一言すべし。總じて、米國は世界中最も女權の強大なる所にして、又女子が男子に均き、高等なる教育、専門の學科を修めたるも、亦此國を最とすべく、其氣質、舉動の甚だ男子に近きは、言ふも更なれど、其風采の(女教師、女學生は除く)存外に、濃厚美麗を競ひて、さかも田舎びたる所ありしには、實に意外の感ありき。獨逸婦人は、都雅ならぬも、淡白質朴の境を離れず。埃婦人の濃粧、艶姿は、また最も優雅高尚の風を失はず、單り米婦人に在りては、其風采としては、尙甚だ、美育の發達運なるを覺えき。但し、其氣質と行爲との長短得失は、細に論らひて、識者の教を請はまくすること多かれども、事項や、餘談に亘るの嫌あるが上になるべく、短縮ならしめんと欲するなれば、爰には省きつ。

避暑の候は、伊、太、利の如き、炎熱の國を除くの外、歐洲大陸にては、我國の如く、格別堪へ難き程の暑氣に苦む事無けれども、富豪の人は、大抵六月の末、七月

の初旬頃より九月の半頃迄は山間海邊に遊ぶを常とし其中等より以下の者も身の程々に應じて僅少の日數許にても旅途に登るを勉むることなり。(女塾のありさまの所と見合すべし) 避寒の候こそは大陸各地大率寒威凛烈の國多ければ長く暖地にも避くべきなれども其頃は富裕にして格別常職なき家族の外は餘りに都府を離れて旅する入少し。(勿論貴族富人等は殊更に暖國の海邊に別荘をしつらひ置きて毎年十二月頃より翌年の二三月頃まで滞在するも少からず)

余が始め渡英して先寓居せしは、フライトン海濱の某家塾なりしかば、倫敦動京に移ろひ住みたる後も其が招きに應じて二三四回も往きて宿泊したりき。ある八月の中旬許なりけん。彼の舊の家に遊びて主婦等と其が海濱を散歩しけるに主婦が曰く此頃は海水浴の氣候にて若き人々は打ち連れて我後れじと競ひ入るにこそといふ。されどわが大磯鎌倉などのやうに怪げなるさまして波打際になれさまよふ子女が影も見えねば余は首を廻らして此所彼所を見渡しつゝ抑も此浦の浴場は何處にかぞ

問ひしかば老嫗打ち笑ひて嫗が眼は霞みたれども能く見ゆるものを御身は何方を見給ふぞ。其れ其所に車のあるをやと指し示されたるを見れば方わが二疊敷許の廣さにもやと覺ゆる長高き疎造なる車の腕車に似たる三方には上部に小き窓を附け前面は開戸になしたるが遠淺の所に幾個も立ち續きたれど距離可なり遙なれば人の潮に浸りたるは能くも見えず。其さへ方分きて一群々をなしつゝぞある。やがて日も夕陽に及ぶ頃馬丁めきたる男どもの車押しつゝ汀に歸るを見れば其が中よりぞ年少の男女は出で來める。さて其爲さんやうを聞けば總て海水浴場には銘々車の持主ありて其望む人は賃を出してこれを借る。斯くて車は持場への所々に押し出さるゝなり。衣服は無輪常服のまゝにて車の中に入り勿論一ツの車に一人づゝなり。但し幼兒などは一所にも伴へり衣服を脱し遊泳衣と着更へて海に浴し終れば復車中に入りて舊の衣裳を着け海濱には立ち歸ることなれば其諸共に浴する人こそは海水浴衣の形をも見もすらめ。其他の人は更に何ふこと能はず。且

此邊の海岸は、此所のみならず、何方の海岸も大抵同様なれども、總て堅半なる石垣を疊みて、又其の往來運動に宛てたる所は、愈シツキイを以て造り固めたる、廣き道にして、此所彼所に、床凭を配り、公衆が休息の料に充つ。又、其近傍には、小き庭園、スエヤの如きものありて、青き芝生、緑なる樹木、心地よげに茂り合ひたる、其が中には、小亭もあり、椅子もありて、これは、大方種々の俱樂部やうのもの、所有にて、會員は、これに入るを得。あるは、別に、金錢を投じて、切符を買ひ、其樹蔭に遊ぶ輩もあるなり。又、ピーヤと稱し、棧橋の如く造りて、其よりも、長く、廣く、大なる所あり。此所には、建物あり、勸工場の如くして、常用の物賣る店もあり。且、時々、音樂などやうの催しあり、老若男女、打ち連れて、爰に集ふも、少からず。

さて、山間の遊びは、いかにと云ふに、泰西婦人が、身軀の強健なる、殊に、最も、英米の女子は、高山峻嶺も、物の數とせず、輕裝杖によりて、巖を蹈み、壑を攀ぢ、險を冒し、奇を探る者、婦人社會にも、甚だ多かり。且、妙齡の女子に在りては、其各自修め得し所の學科に就きて、植物を求むる人あり。動物を尋ねる者あり。

り。地理に歴史に理化博物に、其が轉地旅行中は、勉めて學文を實地に施し試みんとするを、一種の樂とせる輩、少しとせず。其一二見聞の儘を云はんに。

余が、ウヰンダミヤの女學校に止宿せしは、恰も、夏期休業にかゝらんとする頃なりき。都下の黃塵を厭ふ、富豪の家族は、既に、妻子を携へて、此明美なる湖上の風光を稱するもあり。休業時の、最も、長き學校の女學生等は、早く、塾舎を離れて、斯く秀麗なる、山邊の勝景を探るも、少からず。或は、鉛筆と畫學紙とを手にして、汀の巖頭に、腰打ちかけ、餘念も無く、山雲、湖水の姿を模寫せる婦人、太き、フリッキの筒を肩にして、植物を摘み、小き紗の又手を持ちて、蛺蝶、小蟲を捕ふる少女、漣漪に棹さして、幾回疊々の山派を遠望するは、地理學上の研究家、青草露を踏みて、疊々たる古墳を尋ねるは、詩家、文人の舊跡を慕ふ、文學者、歴史家、流派の輩なるべし。斯の如く、思ひ思ひの嗜好に任せて、新鮮の空氣を呼吸し、専ら、身軀の攝養を計る側には、其が學に依り、藝に遊ぶも、すべて、此邊に、貴重なる、休學時日を消せんとする

の徒は、大旨卑俗の人ならぬにも、かたへはよれるなるべしと雖も、まことに是國の人の能く學藝の實踐を主として、且其共同心の深きと、其樂みの高雅なるが多きとには、轉た欽羨に堪へざりしなり。

一日、余が宿泊せる女塾の休業日に當れりき。當校の塾生は百二三十人にして、孰も皆十六七歳より廿四五歳迄の人なり。本日は、珍き客人もあれば、水にまれ山にまれ心を遣りて遊ばんとあるに、余は既に湖上の船は試みつ。近き山には、毎日歩して行きたることなれば、同くは、今少し遠き所に行かまほしと云ふに、さらば馬車にてとて、當家に在る車の限を整へ、荷物馬車をさへ裝束して、出で立ちたれど、生徒のなべてを乗すべきにあらぬば、總人數を三分して、抽籤を爲し、一群は船にて湖水を横り、一群は徒歩にて、今一は馬車にてと競ふもをかし。斯くて、我等は輕車を驅りて行くなれば、必ず第一番に、さす方に到着すべしと語り合ひて、其所より七哩許の所湖に添ひ山を廻りて、軋らし行く道すがらの風景最も佳なりき。行きくゝてある森の邊、水に臨める樓に達すれば、早く既に立ち迎ふる人

あり。誰ぞと見れば、船行の一群なりけり。船は湖二つを渡りて、其間所徒歩すべき場所もありと聞きしかば、少くも我一行よりは、一時間以上は後るべしとの噂なりしに、など斯くはと驚く人、いかで君達に後れを取らんやは、と勝ち誇りたる御達打ち連れて、樓上に登り、と許休らふ程徒歩の群は、やうく至り着きしかば、此所にて、晝飯を喫し、波に浮び草を分け、終日歎を盡して歸りたりしが、是等の遊びを思ふに、我國にては、到底男子同志ならでは、斯くも愉快に、斯くも活潑なる企ての出来得べしとも覺えざりけり。

又、或時例の余が親友なりし、某夫人、其子女三名及び其が友の夫人二名と、打ち連れて、某所に遊びしことありき。其所には、夫人が知己の女史が寓居もありしかば、先其家に落ちつきて、再び馬車を備ひて、海岸の眺望よき野邊に至りぬ。是日の總勢は、女子八人、男子四五人にして、尙男女の子供六名許なりけり。子供連は、別に、傳婢を添へて、遊戯の具をも齎しつ。我等が一群は、銘々の希望異りて、相談に時移りぬれば、若き人達は、痛く、戻

かしがりて、とく／＼と迫き立てしが、遂に年少女子の論に勝を制せられ
 て、テニースを爲すことゝはなりぬ。其相談の有様なども、極めて無邪氣
 淡泊にして、恰も我男、我女達の交際に似たりき。斯くて、銘々、勝敗を競ひて
 打ち興じたれど、余はたゞ、其方法許を心得たる程の事にて、其技の拙き事
 物にも似ず。况て、彼等が軽々と扱へたる、又手は随分に重くして、腕忽ち
 に疲るゝも口惜し。やう／＼一回の終るを待て、余は余が親愛なる草花
 てふ友に親まんとて、辭して花摘みにかゝりぬ。某夫人も、肥大なる人な
 りしかば、己も辭職すべしとて、群を離れつ。尙他に一人の年長女史あり
 しが、其は始より、其遊戯は不賛成なりき。日頃愛讀すといふ、詩集一冊を
 手にして、此所に至るや否や、草を褥に餘念無く、其を打ち誦してありしが、
 扱も、是國の人の交際に馴れたる、我心に協はぬ事ありとて、獨不興氣に打
 ち背くなど云ふ事は容易にせず。此女史も、時々、テニース場さし規き
 ては、我心寄せの少女等に力を添へて、拍手喝采をなし、又、此競争場裡に立
 つ人達も、非番の折には、女史が邊に寄りては、詩意などに附きて、物語ども

すめり。况て、余は、他邦の客なるが故に、此仲間を脱してより、は、人々の殊
 更に注意して、彼や是やと問ひ慰めらるゝが、心苦しさに、また、時々、は、不
 手なる遊戯に交りて、拙き技をも試みたるぞをかしかりし。

英國に在りては、女子が操櫓の術中々盛にして、日和よき日には、各公園の
 池沼中、妙齡の佳人、三々五々、隊を爲し、艇を連ねて、或は古詩を誦し、唱歌を
 誦ひ、心の行く儘に遣るもあり。又、他と競争するもあり。内地の人、外國
 の賓物言ひ交はし、談り合ひて、日の西に傾くを惜むも多かり。余も、親き
 女友に誘はれつゝ、時として、此短艇中に在りき。戯れに、楫を操りて、波
 を揺かんとしては、舟を揺り、舷を傾けなどしたるに、人々の笑ひ興じて、こ
 の悪き水夫の爲に、余等は、魚腹にや葬られぬべきとつぶやきたるもをか
 し。總て、彼國の散策遊戯、衆と共にするを悦びて、又、多人數の相會する仕
 組、種々あるが故に、女子の心も、自ら淡泊となり、快潤となる。同時に、又、其
 に伴ふ弊害も生ずるにこそあれ。されど、内地に歸りては、早く既に、我心
 身の埋れたるやうに、打ち沈みて、忽ちに、家居する事のみ好ましうなりも

て行くもげに境遇は人を造るとやら最と怪きものなりかし。
 別項家庭の條にもかづ／＼云ひ置きつるが如く、凡そ來客の時間は、大抵みな一定の規則ありて、午後三時頃より同六時頃まで即ち喫茶の時にかけてのみ、物することにて、爾餘は唯近親々友等の偶々來訪して、用談を爲すか又は共に學問し、共に職業をさる等の外は、更に臨時來客のある事無し。されば主婦は勿論其侍婢なども、すべての雑用を、是時まで片づけ置きて、衣裳をも改め更へ、身づくろひをも爲して、長閑に客人を待ち受くることなり。斯くて來訪者は、茶時前に訪ひ來て歸るもあり。其最中にも後にも來たる事あれども、其時刻ならざれば客ありとて、別に俄に茶を作らしむる事も無く、其終りたる後に來ればとて更に再び煎ずる等の事もあらざれば、下婢も其定規に違ひて、甚しき多忙を感ずるなどやうの事少し。殊に富貴は富貴、貧賤は貧賤として、格別其外面を取り繕はざる社會の風俗は、定時の茶に添ふる所の熱心も、客の有無によりて、彼是と心配し、或はこれを購ふ爲に人走らす等の事も無し。これに就きて余が笑止にも、且は其天眞爛漫の風俗

中々に擲すべき所あることをも感む思ひたる事ありき。

余が嘗て二三週間、英國倫敦の場末なる某女の家に止宿したりし程、其近傍に居住せる某夫人の殆ど、毎日の如く、余を見舞ひて、わが東洋の風俗どもを聞かんとし、且は余に當國の女子教育の事ども、物語らんとして、さてこそ斯くは頻繁に訪問せられたるなれ。然るに此夫人は、殊に富豪の人のよしにて、余が宿泊せし家の主婦ととも、兩三回彼女の邸宅をも訪ひつるが、其都度大抵茶時にして、其折供せられたる點心やうの物は、いつもいつも品替りて、最と珍かに味もよかりき。然るに某女が薦むる所の品は、必ず乾酪塗りたる麵麩か、さらずば一種怪き味したる蒸餅やうの物なりき。麵麩は、さてもありなん、此菓子は、誠に食ふに堪ふべからざる品なりしを、主婦は必ず參れ／＼と、夫人にもすゝめ、我にも強ひて取らしむるを常とせり。夫人は、ちと迷惑げに見えたりしかども、例の英人が耐忍強き性として、いつも一つはたうべ終るを見たりき。余もこれに習ひて、勉めて、其滞在中、一つはたうべつるが、其主婦が辛抱のよき、又物に平氣なる實

に驚くに堪へたり。此女の家亦在計困窮なるにもあらずといへば若し、我國の人情ならんにはたまには少し勝りざまなる物を購ひても参らせんとこそは勉めぬべけれ。さるを人我は我と思ひすまして更に他に雷同風靡すること無き是國の氣風大率斯の如し。

されば外國の人を招きて其家に止宿せしむる等の事も極めて手輕き事に心得居る故に郭外に居住する人の如きは少く懸念になる時には大抵泊がけに來れと勸むるを常とし其滞在の間も夫婦親子の相親睦する有様より其起居動作の容子まで仔細に見聞することを也得らるゝなり。而して孰の國にも遠來の珍客を愛し且これと談話することを悦ぶ風俗はみな大同小異にして例へば甲の夫人の家を訪ひて其所にて乙夫人に出あふことあれば即ち其伴へる人の紹介を得て乙の人と詞を交ふるに其人は大率必ず某日某時わが家をも訪ひ給はずやとすゝむることなり。斯くて甲より乙乙より丙と順次種々なる人を訪問せざる可からざる場合となりて時としては餘りに其交際の繁忙なるに困難すること無きにもあらず。交際時

期等に在りては度々其案内を謝絶し屢々其紹介人に不滿を感じしめし事少からざりき。これ其外國語の未だ不完全なりしが爲に疲勞を感じる事との已が本國にての交際と違ひて多かりしも一つの原因なりしなるべけれど總じて客を悦ぶの心人と談るを樂むの情彼の國の人の如く甚しからざるが故にもやあらん。限りある漫遊の時間なればなるべく多く見多く聞き又且多くを訪問はんと希望しつゝも猶彼等の如く多數の案内に應じ殆ど毎夜深更に及ぶが如き繁劇の交際を打ち續けて爲すこと能はざりけるぞ遺憾なる。(勿論其交際時期に於ても毎夜の如く宴會に臨むは中等社會に在りてはある一部分の人のみにして總て愈かくの如しと云ふにはあらず)これ則ちまた其体格の強弱到底我は彼に及ぶこと能はざるが故もあるべし。又親き友達に訪はれたる時などには今日我は未だ運動せず茶の時になるまでいざ諸共になど主婦先誘ひて戶外に出る等の事もあり。序に買物をもしてんなど云ひ合せ客も主婦も訪問に所用を兼ねるなど誠に無雜作なる事なり。又是等中等階級の家にては食事に人を招くも甚だ手

輕きものにて、其平素の食物と、また甚しき相違ある事無く、食後には互にかはるく洋琴を奏せ、且謠ひ且躍り或は文談詩話の靜なる樂みに、時を費す等の事もあるなり。總じて來客の接待は、主婦の役目にして、其良人の朋友等も、みな己が受持として、應答談話し、而して其歡を盡さしむることを務むるは、云ふも更なれど、主人亦其妻の女友に訪はれたる時は、非常にこれを好遇することなり。されば、余も其風俗に馴れざりし程、何とやらん異様の感を感じしは、其客として來りし男子の其主人たる女子を助けて、主婦茶をつげば、男客急ぎ立ちて、坐中の女客に參らせ、其熱心の器を取り、皿を配り、主婦立てば、先戸を開き、坐せんとすれば、椅子を薦むるなど、誠に痒き所に、手の届く様なり、其しかせぬ時は、高等の教育を受け、上流の禮法に馴れたる紳士にあらざると、却て、擯斥輕蔑せらるゝなりとぞ。斯かる風習は、女子の爲には甚だ便利よき事なれど、男子に取りては、いかゞあらん。余も其始めこそあれ。慣れては必ず、男子は、なべてを、助けけるゝが、當然なるものゝ様に思ひなりて、其疎なるは、我を蔑にしたるにかと、逆腹立たしうさへ覺えたりしを、

たま／＼我故郷人と、集會せる時、郷に入りては、郷に従ふとやら、其人々が、恰も彼の國の男子の如く、我等を丁寧に取扱はれたる折などには、甚だ心苦き様の心地して、屢々辭して、反對にいかで打ち捨て置かれよとこそ云はれしか。人情は、誰も亦斯の如きものか。さて、此女客の打ち集ひて、談話する時は、中々賑やかなる事にて、喋々嘯々、笑ひさいめく聲の間斷無きは、何處も同じ事なれ共、唯特に敬服すべきは、敢て人の内情隱微の私事に亘らざる事、且荷も一通りの教育を受けたる女子が、假初にも、卑猥汚濁の件を口にせざる等の事なり。若し、爰に人ありて、某氏には、云々の過失あるを聞けり。君は知り給へりやと云はんに、其問はれたる人、我は知らずと答ふるより、外決して他事に及ぶ事無し。さるを、万一然り。彼には、惡き行ひあり。我彼を信ぜずと云ふが如き意味を、一度口に發したる以上は、更に、其人と交際する事無く、偶々、公衆の前に相遇ふも、一寸目禮するのみにて、決して、握手だもすること無し。されば、貴女が口にす可からざる、他の惡徳は、三人以上の人中にて、談ること無し。若し之を談るは必

ず極めて親密の朋友間雨々相對したる時にのみ竊に談らふ事あるのみ。其さへ慎み深き女子はなるべく避けていはざるなりとぞ。これ他の惡を云ふは已先其資格を落さんことを怖るればなり。さるからに其女どちの談話も中々有益の事少からず。女子教育及び文學技術の事動植物の事地理歴史現今の出來事諸職工業の事等は云ふも更に一國の政治經濟法律の問題等迄其女子が上に亘れる事は熱心に辯論談話する人實にまた少しとせず。總じて女子が團結力の強固なるは却て男子にも優れりとぞ聞く。要するに女子も格別恭敬謙讓の度を過して人前に笑ひ人後に泣き陽に媚びて陰に誹る等のこと少く敵も味方も盡然として人々みな其自ら信ずる所に厚く面従後背の風甚だ稀なり。(家庭教育の所にも云へるが如く)故に其親友の他人より攻撃を受くるが如き事ある時は辯論抵抗に至らざる所無く其が爲に已亦誹難を受けなどする事あるも更に怖れ撓む所無きに似たり。余が英國の女友中日本女子を攻撃したるを憤りて其友人と殆ど從來の交際を断ち又は疎く成りし者三五人の多きにも達せるを見たり。

此朋友間交際の氣風信義あり勇氣ありて其表裏多からざる一點に至りては羨ましくも羨ましく稱するに將た餘りある好風俗にして我等も亦速に之に習ひ移らまほしき心地すれども凡そ一利一害の相伴ふはまた誠に免る可からざる理にして其自重自信陽に事を所理する其男らしき氣象の裏にはまた極めて強情我儘の弊を醸し中には其良人に抵抗し其親戚朋友と議論口闘を爲し同氣相求めて共に俱に相結托し穩ならざる舉動を爲したる例なども亦これ無しとせず。斯かれば物は其外面の麗し立ちたらん事のみを見て其裏面の醜き所を知らざればまた思ひ過つ事無きにしもあらざるべし。又友達の互に訪ひもし訪はれもせらるゝ折客も主人も餘義無き所用差支へ等のある時は決して遠慮無く今日は閑話することならずとかまたは幾分時間は談話すべしとか云ふは常の事にて大方時を重んずる一般の風俗は更に怪ども無禮なりともつぶやく人無く又其約束の時間は誠に正しくして十分と間違ふこと少ければ相互空しく光陰を費すの歎あること無し。さればこそあれ。今日ほど待ち設けて客を招じ或は招ぜらるゝ

時には互に歡を盡し興に入るも理なりかし。(以上多くは英國の風なれども、他もみな大同小異なり。)

余が嘗て傳聞したりし、泰西の風俗は、往々歐米を混合せしこと少からざりき。又上下を通じて、同様に思ひ過りたる事無しとせず。例へば未婚の處女が交際の上に於けるが如きは、大に其豫想と違へりしを感じき。前にも、老ばく云へるが如く、余が最も多く見聞せしは、英吉利にして、次は佛蘭西に似たるもの多しと、或人は語られたる、げに左ぞ覺ゆる。

英國婦人社會保守主義の人は、常に近來米國風の輸入して、大に女子の風俗を紊亂せりと歎ずる者多かりき。されど其はいかゞあらん。其一事を云は、女子が自轉車に乗りて、公衆の中を走り廻るが如きは、第一に健康上の大不利、第二に風采上の欠點、女徳に傷くるものなりと痛論せり。然れども、此流行は益々隆盛に赴けるが如し。(自轉車は近來女乗と云ふもの出でて、其當時女子が健康上甚だ不利となりと云はれし論は、打ち消されぬ。)但

し上流社會の少女は、或取り除けの家族の外は、決して獨行他出する等の事無く、其交際時期の年齢に至りて、諸々の宴會に臨むに及べば、母及び其に代るべき近親家庭女師などの必ず、隨伴することにて、其席上にも、彼等が注意中々周到なり。又中等社會にても、先大抵は上流と均く出來得らるゝ限りは、獨行を許さず。勿論、兄弟許多持ちたる女子は、互に男女の友達の來訪する毎に、能く助けもし、助けられもして、露隔て無く見ゆれども、兄が妹に對する注意亦極めて細にして、敢て其過無からしめんと勉むること最といみじとぞ。されば、彼國の諺にも、男同胞持たる女子許心の動かし難きものは無しとぞあめる。この一語にても知らるべし。扱下等社會はいかにと云ふに、彼等は無論、獨身にて他出をもし、人にも交際することなるが、其宗教上より打ち固められたる道徳は、暗々に信じ、冥々に怖るゝ者の存する故に、存外に、其守る所薄からざるなり。加ふるに、女子を保護するに厚き法律の制裁は、陰に男子を抑制して、敢て容易に計り犯すことをせしめずと云へり。且、彼等が慾の淺薄ならずして、深遠なる能く、自が將來の利害を勘考分別せ

しむる力を興へて、よし無き若氣の蹉跎に、一生を葬り終る者存外に多からずとぞ聞く。殊に、一度驟きて、賤業の魔界などに陥りたる者は、いかなる場合ありとも再び普通の人間界に浮び出ること能はず、子女は、其正妻の出の外決して子とし見ること能はざるが如き、一つは彼の氏無くて乗る玉の興などいふ思はしき、萬一の僥倖を防ぐの障壁ともなりけるなるべし。さりとて十が十百が百過れる節無しと云ふにはあらざめれど、自由をもとむる風俗にして、猶斯の如きは實に堅固なる彼等が信仰心と事に臨みて、自己が利害如何を顧ることの極めて鄭重なることによるなるべし。こはこれ少女が上のみならず、政治に商業に、教育に技術に、愈盡く志からざるは無きなり。

婚を結ぶにも、先大抵は、母、伯母、又は同胞の心に善しと思へるを見立て、當人に告ぐるもの多く、又稀には自ら思ひ定めて、親に希ふもあるべし。扱後は、親は唯無言の間に繁く、其が婿がねにもと思ふ人を招きて、交際を試み、女をも伴ひて、其家に至る事もあり。斯くて双方夫たり、妻たらんと決心して、

近親等にも異議無ければ始めて結婚の約は整ふなり。英國にてはこれより婚姻迄の間の大抵長きが多き故にか、其後は男女二人のみして、談話し、他出をもせしむることあれども、此間柄極めて嚴格にして、毫も亂れ接むこと無しとぞいふなる。

佛蘭西の未婚女子は、殊に最も父母の守り嚴にして、荷も身分ある人の決して、獨行他を訪問する等の事無し。且最も、注意深き家庭に在りては、嚴なる時間の規定ある、學校の往復すら、母必ず女子を伴ひて送迎すなり。(中等に在りては斯くて、許婚の後、男子もなるべくしかすれども、女子は殊に他の宴席公衆の群集する所に臨まず。専ら家に在りて、謹慎を旨とす。さる故にや、結婚約定の後、はなるべく、嫁娶の期を急ぎ、英國の如く許婚の男女が互に、往來訪問して、久き歳月を費すこと少しといへり。

諸彼國の新夫婦は、必ず、其結婚の式を舉ぐると同時に、新に一家を作ることにて、此新家族には、舅姑も無く、小姑も無く、且世間姑母の口餘りに噪がしからぬ社會に在りて、殊に、たゞ父母の命これ従ひて嫁したるにもあらず。兎

にも角にも已熟く承諾して傳くめる夫の家計の氣兼ね苦勞も無かれ
 ば、たゞ歡樂のみありて存すべき道理なれども物は既に成るの樂みに
 は、早く悲みを含めりとか。彼の談にも、女子が生涯第一の嬉しき時は、許婚の
 後結婚迄の間なりと云へるを見れば、其交際場裡の花と稱せられて將來の
 千春を夢みる裡ぞ盛なるべき。况て離婚の容易ならざる國柄に在りては、
 夫婦の間に波風立ちて縁の綱の切るにも切られず。断つにも断たれぬ事
 の出で来ては、誠にも云はぬ苦痛懊惱あるべしと雖も、要するに彼等女子
 は、我の如く社會の壓制を受くること少きが故に、ともすれば、我儘氣隨の
 を生ずること多きに居るが如く、從ひて少く才氣ある女子に在りては、女子
 より、男子をあやなして、男子却て彼等が口車に乗せらるゝことも、又其侮辱
 を受くることもこれ無きにあらずと聞くこと、いと怪かりけれ。
 因に記す。男女結婚の式を舉ぐれば、兩々手を携へて直に旅行する事なる
 が、げに新婦の新郎と相親む情の深くなりて、已む無くも、萬我手一に取ら
 ぶ習慣をもつくるには便宜なるべし。彼國の女子は、随分に富貴の家に傳

かれたる人も、自己が身邊の事は、なるべく親して、其他の事も、處世の學問を、
 實地に施さしめんと勉めたる、教育の結果は、自立、獨行を尊ぶの氣風を強く
 して、深窓の下に、生長せし、年少の女子も、存外に危險を犯し、思難を嘗め、新事
 物を見聞し、新空氣を呼吸することを、悦び樂むにこそあれ。されど、新婚旅
 行の門出に、新婦、即ち愛娘が、其慈母と手を別ちて、新郎の車に揺き載せらる
 る時は、母子、なほ互に泣きて、其恙なきを祝し、祝せられつゝも、涙ととも、に再
 會を期して、出で立つさまを見れば、親の子を思ひ、子の親を慕ふ心は、今古東
 西、つゆ替るふしもあらざりけり、とぞ覺えたりし。
 女子が、書翰に心をこめて、其禮法、文句、書風を、愛たく、麗からんと勉むること
 とは、恰も、我、藤氏時代、上流社會の、女房達がありさまも、斯くやありけんと覺
 ゆるまでなり。(勿論、重に、富貴の輩及び好事の人達をさす)正式の時、及び、清
 素を尊ぶ人は、良好なる白紙を用ふるを常とすれども、風流好める若き人達
 は、競ひて種々なる色紙(濃色は用ひず、薄色のみ模様)の、漉き込み、名頭の文字
 の入れ方より始めて、用紙にしめ置く、香の薫り、其が中に、摘み入るゝ花の種

類又は古詩の心ばへを取り、名文の趣を抜きなどして書きなす文に詞撰をし、敢て荷もせざるなり。但し中等及び其より以下の處普通の者にて、書翰用紙は封筒と同様の品にて、四折にして筒に入るに、冗無きやうなるを用ふるを常とし、近親や友どちの其中に、さまざまの花びらを摘み入るゝ等は、一般の風俗のやうになりたり。

報酬は必ず一定の極まりありて、いかなる人にも正金を以てす。其他少者賤者より、貴人長者に贈るは、決して日常必需品を以てせず、自家の製作にかかる物品、或は種々のをかしき心を籠めたるものを撰ぶに限る。蓋目うへの人、目下の者に贈るには、これと反對にて、必需品を以てすることなり。

扱高尙なる贈與品は、大方花及び花束の類を多しとす。小兒には、玩具をも菓子をも贈る事なれども、我の如く、外箱器類の後にて、使用し難きやうの無用の物を贈ること無く、大抵は店頭にて購ひたるものに、更に虚飾を附け加へざるが多し。されど、時により、場合により、又人によりては、外部の器包物紙、其をくくる紺紐の色形等、造意匠を凝らして参らす事も、これ無しとせ

ヤ。

余がインフルエンザに罹りて、寓居に籠らひ居ける程、某夫人の許より、健康の意によりたりと云ふ麗き花を、小き土焼の鉢に植ゑて、添へられたる書狀には、其鉢物の花の人めきて、花自らが云へる、口上書のやうにし爲し記されたる、其大要は、己は今日某夫人の代理として、親愛なる御身が臥床を見まへり。彼の無情なる醫師は何人も此所に入ることを許されねども、唯我等が仲間をのみは禁ぜず。己は健康なる名によりて、開きたる花なれば、最も御身が好伴侶なりと信ず。請ふ。我に許せ。今より君が枕邊に侍りて、君が憂む時、君が悲む時は、己は常に笑ひて、君に向ひ、君に近き、遂に君をして健康なる我等が伴侶の一人たらしめんと勉むることをとありき。こは、各種の人の、何品を贈られたりしよりも、嬉しくもあはれにも、覺えて、げに、病苦は、此花にぞ慰められたりし。

クリスマスの贈り物は、各國大抵行はるゝことなれども、佛國などにては、猶新年の年玉を取り遣りする風、盛りなるが如し。贈與品に就きて、其始の程

は何とやらん異様な感じを持ちたりしは、其携へたる人の餘りに其品に就きての効能を述べたつる事なりき。例へば、林檎六つ七つを持って來れば、此果物は甚だ味よく、香氣亦殊に愛たし。見給へ。此艶やかなる色さへ似るものこそ無けれなど云ふ儘に悦び受けて食すれば、格別普通の物と替ることも無かりしなり。其餘りに、自慢を並べ立てらるゝ時は、何と返答してよきやら、思ひ分き兼ねて、たゞ誠結構々々とのみ繰返したりしも、後に思へば、我ながら抱腹に堪へざりけり。これ恰も我國にて自ら良しと信じたる物さへ、誠につまらぬ物なれども、又は、塵末なる品ながら、殊更に謙遜して贈るに均く、彼に在りてはなるべく、我愛たしと思へる物を贈りたりと思はれん心なりとぞ。されど彼國に在りても、心深き人は、同じ褒めやうも、わざとならずして最良くぞありし。

ある時某嬢の自ら製したる一莖の花、小やかに麗き、籐の籠に挿して持て來たり。扱其を、余が坐右の小卓の上に置きて、この花君は愛し給ふにやと問ふ。余は最もいとほしむ物のよしを答へたるに、オ、嬉し。自ら深

く愛する花にこそあれ。初々しき手して、君の爲に造りたる物よ。濃きは、我誠なる心の色と見給へかしとて、報然として恥づる所あるが如く、徐徐とさし歩み寄りて、白く肥らかなる手に再び取り上げて、余が膝に置かれたる嬢が心は愛らしき此葩に、接吻せよとにや。余は覺えず、親愛なる我嬢よと、手を把りて、掻きも懐きぬかし。是等可憐なる少女が舉動は、大抵、其母なる人が、家庭の熏陶よりなれるなりけり。

又少く、交際往復したる女友は、互に請ひて、寫眞を交換するは、一つの風俗のやうに思はる。彼の禮法には、年少の女子は、若年の男子とは、寫眞を交換すべしなどあれども、近來は、随分には、是等の間にも、交換するの風盛になれりといへり。されど、嚴肅なる家庭に教育せられたる女子は、斯かる場合に於ても、青年男子に、我寫眞を贈らざる可らざる場合には、必ず、母或は其他の家族と共に寫したるを、贈ることにて、己一人のみ撮したるは、贈らずといへり。注意周到ならん人は、左こそあるべき事なれ。

別項家庭のありさまの所に衣食住の事に就きては更に詳記すべしと云ひ置きたれば本篇に止めんとするに心いと無くて總てを省かんかと思ひにしかど此條には尙多少参考にも成りぬべくやと思ふふしもあれば其があらましを抄記しつ。

總じて歐洲大陸の女子が晝間の服は極めて淡白清潔なるを尊ぶ。(勿論國により人によりて一様ならずと雖も尙も上流の婦人見識ある人は皆本文の如し)先朝の服は極めて麗末なるものにして此間種々の職務に預る。晝飯後午後三時頃より晝の服に更ふ。(勿論人により場合によりては晝飯前に着更ふこともあり)茶時過ぐれば更に夜食の服に更ふ。これを中等以上の人の服装とす。是より以下は午前の服と午後の服と兩度更ふるまでなり。こは随分下等の婦人と雖も尙もかづくも一家を経営しつある程の者は朝晝兩度は更衣することにてこれは立ち動く時汚れを厭はぬやうの物を着るは經濟上の都合最も多きに居るに似たり。前條にもしばく云へるが如く處女の衣服は極めて清潔質素を尊べり。佛國女禮

の書にも滿二十歳未滿の女子が裝飾の寶玉類は白色の眞珠珊瑚銀鑲に附したる青藍色の寶石等を用ひて金剛石其他餘りに華美なる玉石を用ふ可からずとある程なりかし。

女子が時の流行を競ひて其後れざらんことを恐るゝは孰の國も同様なるべけれども尙高等なる教育を受けたる中等以上の婦人はなるべく其流行も自立たぬやうに且高雅の趣を失はざらんと勉むること切なり。殊に一つの見識を立て、最も其品格を尊ぶ女性に餘りに其流行を逐ひてこれに走らざらんことを勉め己が容儀風采に不似合ならざらんことを欲するなり。

さて女子が衣裳を製するには其極めて富貴なる人は裁縫師を自宅に呼び寄せることあれども先大抵は此方より其家に赴くことにて其着付け室には大なる鏡の種々なる角度に作りたるを三方にも四方にも立て前面背面は勿論左右の側面をも明に見ゆべく爲なせり。又暗室の備もありて電氣瓦斯燈など好みに従ひて點火し夜會等の服の色模様は撰ばしむることな

り。殊に最も老巧なる裁縫師の如きは其客の顔色と姿勢とを一見して、甲には此色此形乙にはこれと撰びてまゐらするが、其人柄に似合ふこと、實に百發百中なりと云へり。然し大方は先自ら撰び出て定むるを常とし、色形の取合せより帽子の飾に至るまで、其意匠を凝らすこと容易ならず。中等より以下の常服は大半自製なるが多き故に最も其配合と撰定とに注意することなり。

既婚の婦人は多くは華麗なる衣服をも着飾をも施せども、これ將た夜會、夜會等の物に止まりて晝間の服は清素なるをよしとせり。いかに艶麗華美なりとも色形飾の卑野なるは俳優又は戯むべき女子などに類せりとて、大に上流婦人の擯斥する所なり。

衣服に挿み、花束に作りて自ら持ち人にも贈る花卉には國により所によりて種々の歴史意味等許多あるよしなり。今爰に英佛の風俗習慣に云ひもて傳ふるもの、二三を掲ぐべし。

例へば、年若き女子は旨と白紅薄紅の薔薇、長春、水綿花、馬鞭、蓮、刺花、雁來紅、

卷耳、米蘭、白雛菊、百合、合花、錦葵の類を用ひ、新婦の必ず橙花を着くるは貞操の意を表するなりとぞ。黄薔薇、桃花、玉簪花等は必ず先既婚の婦人に、山蓮、菊は寡婦に屬するものなりといへり。薑菜、白萱翁の如きは何人にてても可なりとし、桂樹は勝利者にのみ贈るものなりとす。其他吉凶事に就きての區別各種の意味、歴史ある花の撰擇は中々に容易ならぬ事なりとぞ聞こえし。

其他、髪飾りより始めて一切の附屬品も、たゞ色形の配合を旨とし、高雅の趣味を失はざらんとを勉むるを教育ある女子が心ばへとすなりと云へり。食物も亦家庭の所に述べたるを省きて、やゝ其漏れたるを補ふべし。前條にも云へるが如く、食物の献立、注意及び食堂、食卓の配置等は、いかなる富貴の家と雖も、大方主婦が指揮撰定になることにて、大抵の家族に在りては専ら下り立ちて主婦が物すなるは、格別我國と異なる所無し。唯爰に甚だ便利なるは、其食物調理の火爐、器物の工合と其方法との能く整頓したるが故に、其時間を限りて爲すことを得らるゝからに存外、時を費すこと少く、

加ふるに女子が交際の男子と均く頻繁なるが爲に種々の家に至りて色々の食物をも主婦自ら味ふことを得る等の便宜は、我の如く主人の屈々各所に於て珍奇佳味の料理を食し家に歸りては其が食物の小言を並べ、これは飽きたり彼は珍からずなどつぶやけども、籠り居がちの妻女はいかなる物の流行して、何様にするが珍かなるかを自ら思ひ量ること能はずして徒に苦慮心配するが如くならざるなり。但し女子が高等なる學科を修むることの、日々に益々多きを加ふる儘に彼等は次第に厨房の業に勞くが如き些末細密の小事に係ふことを嫌ふ者出で来て、其夫たる人は大に迷惑困難を感ずるに至れり。夫家に還りて晚餐の食物を問へば、妻は冷然として例の羊肉と馬鈴薯となりと答ふるを常とせりてふ、冷評をも聞きたりき。さる事もやあらん。

彼の國の語に、聰明なる人は其主婦に會見せざる前、先室内裝飾の形狀を見て、其志行禮容の如何を知るると云へる、最と面白き事なり。室内の装飾は、いと主婦がしわざに屬して、而して其心趣を顯すものなれば、賓客養應の時な

どには最も深き注意工夫を要する事なりかし。扱其裝飾法も其國により、人によりて、其方法も嗜好も將た習慣も多少異なるべしと雖も、概して云へば、甚だ濃厚華麗なるを主とするに似たり。然れども、高尚優雅を尊ぶ、藝術家、學者等の家には、殊更に淡装を爲して、自ら悦べるも多し。又近來好事なる貴族富家に在りては、日本風と稱して、家屋の建築庭園の構造等にも、亦我國風を交へ用ひたるもあり。且裝飾具の調度の如きは、大抵の家にて、一、二つは、日本品を置かざるもなき程なれども、唯其品物の過半は、仕入れものに於て、甚だ不親切なる廉造の品のみが見えたることを、最ともくかたはら痛かりしか。されど、稀には、我内地にても、多く見ること能はざるが如き、珍器古物の飾られたる、げに天然に造られたる、美術自らなる、高雅の趣を供へて、單り、兼に異りたるも、愛たくいと嬉しき物から、かたへは、いと惜くさへ覺えたりし事ぞありし。

彼國の習慣として、家族の油繪知友の寫眞は必ず額として、或は寫眞挾に入れて、其書齋寢室等に掛くことなり。稀には、客室に懸くるもあれど、こは、

例外の事なりといへり。
 寢室の裝飾配置を能く秩序立て、清潔に爲置くを女子のたしなみとして
 女教師などは常に女生徒に向ひては、御身等が一家をなす時能く整頓せし
 むべきは寢室の裝置に在る。彼所は常に人の見るべき所ならざれば殊
 に能く注意すべし。これ其獨を慎むの意なりなど教ふるいと最良くぞ覺
 えし。

英京なる某豪家の主婦が我等夫婦は貴國に遊びて其家屋庭園の構造の
 甚だ幽遠高尚なるに感じて其れに就きての圖面等の各種を求めて歸り
 つ。我職工等を集めて心を盡して造らしめられたれども思ふやうにはあら
 ず。兎まれ一日來て一覽せられよとありしかば其はいと珍かなる事に
 もとて往き見たるにげに三室を通して造りなしたる大廣間床の間あり
 違ひ棚あり。月形の窓花卉彫刻の欄檻より始めて大方何一つ不足せる
 所もなく障子は大なる硝子張にて敷物は和かき天鵝絨氈なり。御厨子
 黒柵書棚やうの物軸置物花瓶香爐の類はすべて日本製の物なり。庭園

には泉水あり。築山あり。木石の配置花植の模倣勉めて我國風に擬せ
 られたれどもこは家屋及び室内の形狀に比すれば痛く劣れり。主婦は
 左も自慢氣に味つけ海苔菓子など出して緑茶をさへ煎じくられた
 る香味ともに變じて何の取所も無き物なりしかども三藏法師が故郷の
 扇を見てとかや云ひけんやうに山海の珍味に増して嬉しくも愛たくもあ
 ばえたりしはや。

女子風俗の中に於て尙婚禮喪祭等に就きての概畧をも掲げんとしたれど
 已に覺えずして筆の行く儘に女子教育の一項を挿入せしが爲め遂に本篇
 に於て已む無くも其を除かざる可からざるに及べり。されど此三項も各
 種類別の中に所々交へ記したることもあれば其大方は知られたらんとて
 斯くは省畧することにはしつ。
 此婦女風俗は當時を追想して思ひ出るまゝを記したるなれば其事項の混
 亂せる其順序の前後せる等讀者幸に宥恕あらんことを希ふものなり。

泰西婦女風俗

終

明治三十三年八月十五日印刷
明治三十三年八月十九日發行

著者

下田歌子

麹田區山田町二丁目古番地

發行者

山澤平俊夫

大日本女子會代表者
豐多摩郡千駄ヶ谷村原宿
二百十番地

印刷者

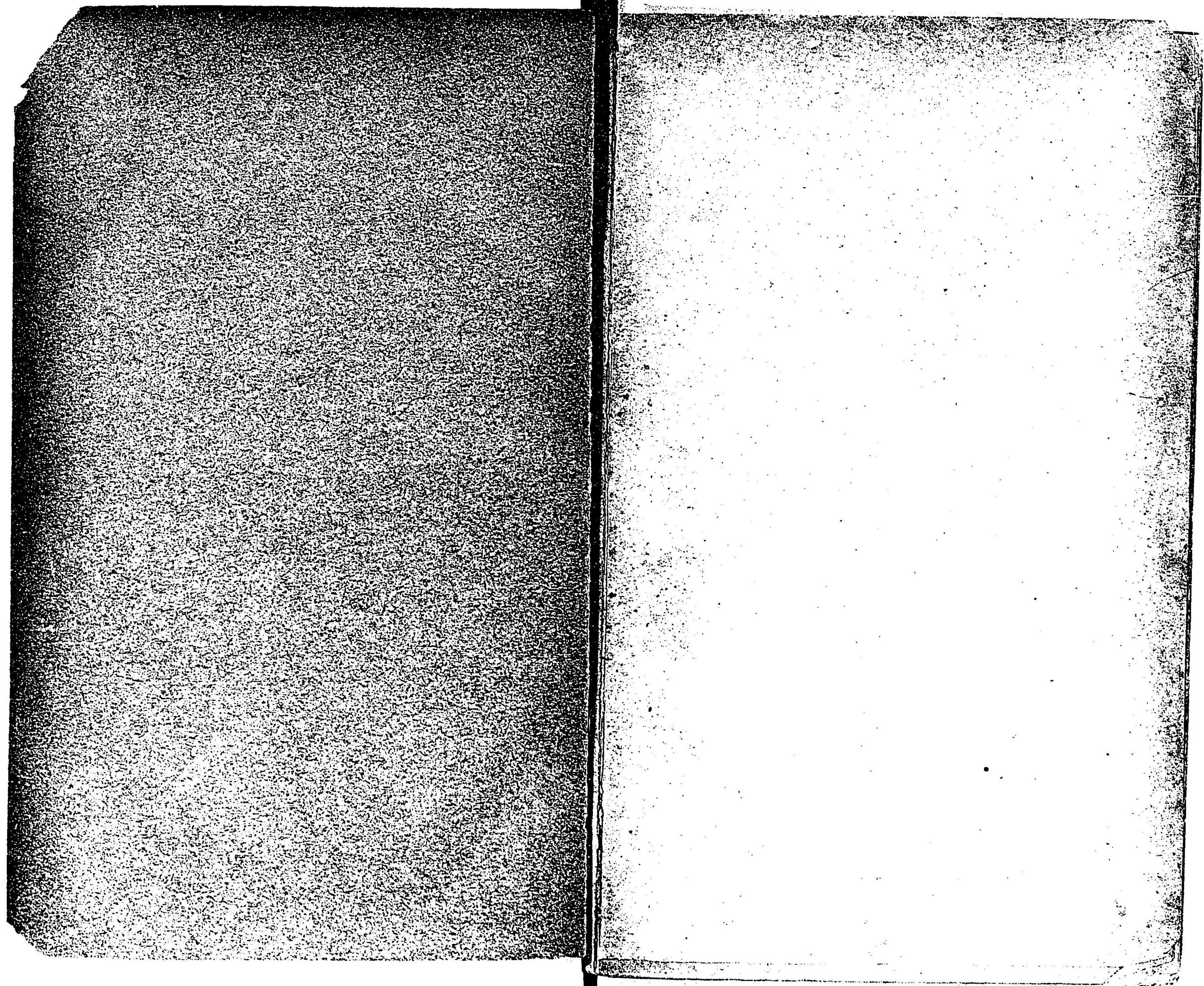
吉岡巖八

牛込區市ヶ谷町二丁目
十二番地

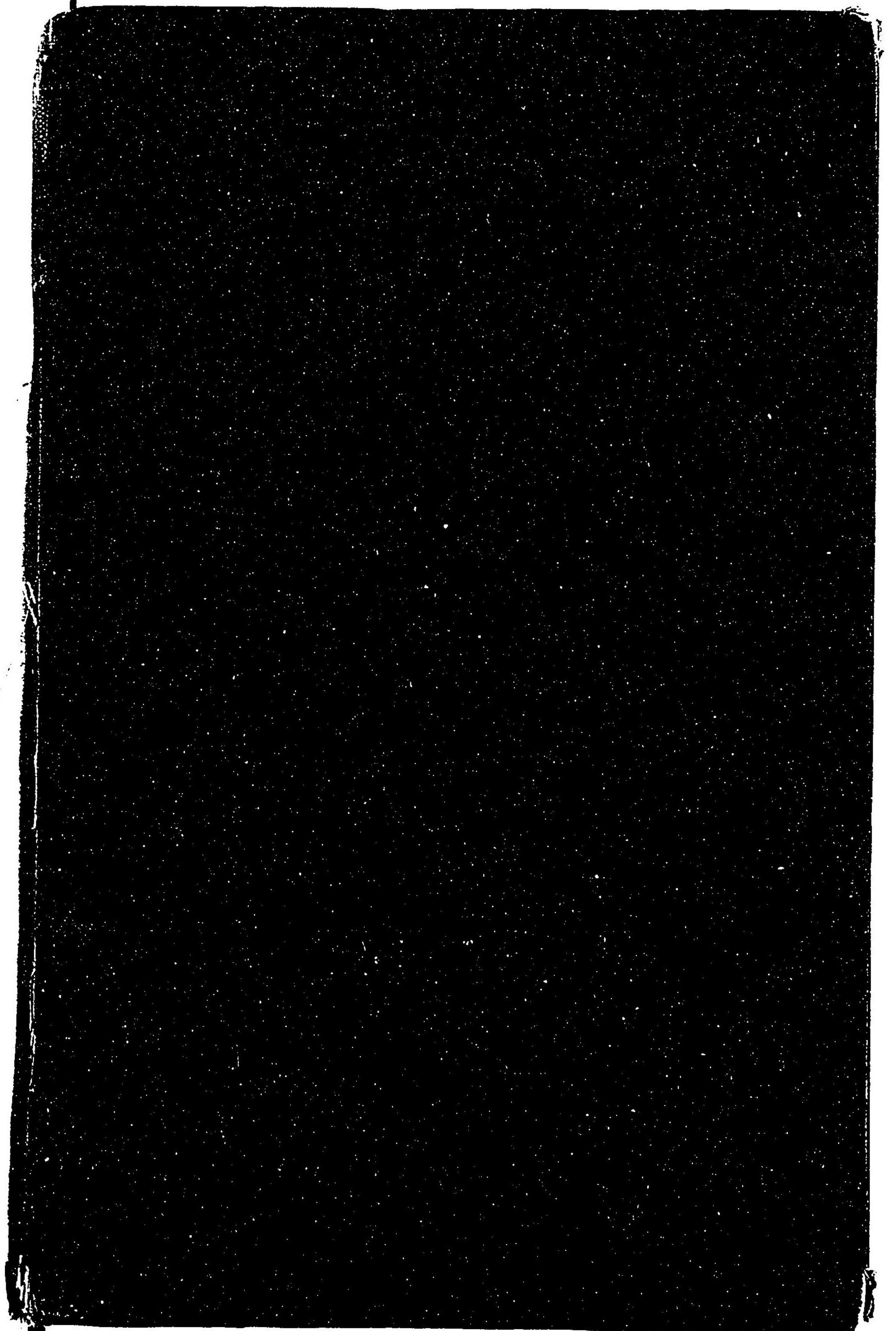
賣場所

有斐文閣

神田區一橋通七番地



78
191



027355-000-4

84-190

泰西婦女風俗

下田 歌子/著

M32

ADJ-0111



